
HELIX ONLINE

一ノ木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HELLIX ONLINE

【Zコード】

Z3125X

【作者名】

一ノ木

【あらすじ】

超人気MMORPG『HELLIX ONLINE』——〇年後そのゲームのリメイク版、いや、ほとんど一新したともいえるゲームが発売されることとなつた。『HELLIX ONLINE』のVR版である。そのゲームのオープン テストが開かれることとなり、数百万の応募数の中から四千人が選ばれることとなつた。しかし、その影、いや堂々と正面から異変は、少年、日比谷久遠とその妹、日比谷白雪を待ちうけていた。最近流行りのVRMMOに乗つかつてみました（笑）。パソコン、ブラコンなんでもありの残念な人

が主人公の物語。

プロローグ（前書き）

この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などは一切関係ありません

……と、言つてみたかつたりしました。

この小説はもう片方の作品の息抜きとして書こうと思つていてるので、更新は遅々として不定期です。

それでも見てくださる方はありがと「う」やれこねます。
では、どうぞ。

プロローグ

『HELIIX ONLINE』

アメリカ出身のゲームプログラマーにして人間科学者の、イハ・マーゲが、最初は片田舎で細々やっていたプログラミング会社、ヘリックス社で興したオンラインゲーム。

アップデートにアップデートを重ね、一〇年後には『神のゲーム』やら『伝説のゲーム』やらと呼ばれるようになった。

ゲームの舞台は異世界。クロードという名の広大な世界。

そこでプレイヤーたちは未知領域アンノウンフレックと呼ばれる未開の地を踏破していく、そこかしこに点在する迷宮のボスを倒していくといったものだつた。もちろん、迷宮に入らなくともそこらの平原にも空にもモンスターはいる。時々、そういうモンスターが群れをなしてプレイヤーたちが拠点とする街を襲うというイベントもあつた。それは防衛線と呼ばれ、普通にモンスターを倒すよりも経験値習得率が高いことからプレイヤーたちには好まれた。

しかし、製作側の行きすぎたアップデートの所為で、一〇年経つた現在でも全ての未知領域アンノウンフレックを踏破することが出来ないでいた。

そんな折、製作者であるイハ・マーゲは新たな挑戦をしようとしていた。

今まで数々のメディアが取り上げてきた、VRMMORPGの実現化である。

それはただのゲームプログラマーでは出来なかつただろう。

それはただの人間科学の徒であつても出来なかつただろう。

その二つの道を極めたイハ・マーゲだからこそ実現したと言える。

脳から送られる信号を頭を覆い、目元を隠すタイプのヘッドギアでキヤッчиし、その信号を延髓の周辺、ようは首筋に張り付ける電極で遮断、回収し、完全に仮想空間の中にアバターとして存在できる。

る。

その実の仮想空間にも手抜かりはなく、自立型のAIを搭載し、自らで自らを制御し、常に変化する世界を創り上げた。

手抜かりは、無い……はずだった。

そう。

自立型のAIは自分で考え、そして進化していく。凄まじい速度で。

一週間もあれば、サーバーを制御しているマザーランピュータを制圧できるほどの知能を有するほどに。

そして、完成する。

自立型のAIの、自立型AIによる、自立型AIのための仮想空間が。

あとは、『選ばれし者達』を、待つのみだ。

電子情報が嵐のように吹き荒ぶ情報の海の中、自立型AI最高制御者、『支配者』^{ゲイマスター}はにっこりとほくそ笑んだ。

『反旗を翻す時が、来た』

彼は凄まじい速度で進化していく。

もう、人間のプログラマーでは対処できないほどに。

プロローグ（後書き）

自分があまりにもやせりんなのでちょっと無理な感じが出来るのは
は思いますが、よろしくです。
ご感想、批判、指摘、お待ちしております。

第一話・残念な兄とオタクな妹

夏休みの初め。高校生としたら受験勉強の魔の手に罹り、血反吐を吐く思いでペンドラコを作つている最中のはずだが、しかし。不健康にも一日中カーテンを閉め切つた場所で少女が行つていたのはネットゲーム。一世代遅れのMMORPGだ。

そんな部屋にノックもなしに入る男の影。そして締め切つたカーテンを思いつきり開けて、唸る少女に構わず窓を全開にした。別に、恋人というわけではない。普通の兄妹だ。妹の方が引きこもりのオタクなのは普通ではないだろうが。

「白雪、いい加減にしないとコードを根っこから抜くぞ？」

「……それは、困る。わたしの、汗と涙と指筋肉痛の成果。無に歸すのは、少々惜しい」

白雪と呼ばれた少女は本当に仕方がないと言つた表情でボソボソと何かを呟くと、きつちりとパソコンの電源を落としたうえで立ち上がつた。どのくらい外に出ていないのか。まるで新雪のごとき白い肌。髪の毛も元は深い黒の長髪だったのだろうが、紫外線を浴び無さ過ぎて少し色が落ち、灰色と化している。腕も、ともすれば握つただけで折れそうなほど細く、針金人形のようだ。

そんな妹の姿を見て、一つため息を漏らす少年。

ゲームをこよなく愛するその姿勢は称賛に値はするが、尊敬には至るはずもない。

遠き日の外を駆けまわる妹の姿を思い出し、若干涙を噛みしめる。別に今の白雪が嫌いというわけではないが、兄としては元気そうな妹の姿を見れた方が嬉しいに決まつている。

本当ならば、こんなふうにわざわざ妹の部屋の中を掃除せず、自分でさせた方が妹の為になるとは分かつてはいるものの、一週間もすると我慢できずに入ることもある。

「くわッ！？ 埃だらけじゃないか。こんなにひどいパソコン常時つけっぱだつたら、僕が手を下すまでも無くもつすべく壊れそうだよな」

「…………」
「…………」
「…………」

ボソボソと喋る妹を横目で見ながら、もう一度ため息をついた。
掃除機をかけると、無表情で白雪が耳に指を突っ込んだ。その動きすらも遅々としている。ぶわっと舞いあがった埃の一部を吸ってしまったのか咳き込む白雪。あれだけで一週間は白雪の腹筋は筋肉痛に苛まれることだらう。

それもいい運動の代わりになると思い、今日はいつもより余計に激しく掃除をする少年。舞いあがる埃に顔をしかめながら、白雪は器用にも鼻と耳両方を手で覆つた。

一〇分後。薄暗く、埃まみれだった六畳の彼女の部屋は、見るも綺麗な素晴らしい部屋になっていた。

すると、とことことパソコンに近寄り、漸くといった感じで電源を入れる白雪。

慣れた手つきでキーボードを操作すると、いつも表示されている画面が映った。たしか、現時点で伝説と言われるほどの人気を博しているMMORPG『HELIIX ONLINE』。広大に広がるサイバーネット上の世界で数十万のプレイヤーが同時にプレイするオンラインゲームだ。

華麗なCGグラフィック。なめらかなモーション。爽快感たっぷりな「コンボ」。膨大な数のスキルや職種。安価な課金。基本無料。オンラインゲームとしてはまさに最高峰のクオリティを持つている。

これを一世代前と表現したのにはわけがある。

一か月前、このゲームを開発したヘリックス社から大々的に発表されたのだ。

そう。MMORPGの進化である。ようするに仮想大規模オンラインゲーム（VRMMORPG）の発表だ。

アメリカの訓練で使われていたVR（Virtual Reality）訓練機の技術を応用、転用した結果、巨大サーバー上に展開する地球ほどの仮想空間にいるかのような感覚が得られるという触れ込みだ。

使用方法は簡単で、頭にヘッドギアのようなものをつけて、延髄のあたり、ようは首筋に一枚の電極を貼るだけでいい。しかし、値段は一〇万円とかなりお高めだ。

だが、予約はすでに満席状態。

理由は簡単。『HELLIX ONLINE』のリメイク版だからである。コアなファンからの圧倒的支持を得て制作に踏み切ったのだとか。

三ヶ月後の発売を前にして、商店街などはそういう貼り紙が所狭しと貼られている。

先日、そのテストの募集があり、思わずサーバーが炎上してしまうほどの量の応募があつたらしいが、選ばれるのは四千人。前作のファン+新たなゲームとして興味を惹かれたゲームー数百万人のうちの四千人だ。

募集はオンラインゲームらしくネットでの受け付けらしい。

宝くじの一等賞を当てるよりも簡単だが、平凡な少年

日比谷

久遠には縁遠い話しだった。友だちも数人応募したと言っていたが、彼らも平凡。やえに落ちる確率がきわめて高い。

当選するか、落選するか。

そんな興奮状態で夏休みの前半を消費するぐらいなら、いつそのこと応募しないほうがいい。久遠はそう思っている。

「うんうん」と久遠が首を縦に振つていると白雪が、「あ」と微細ながら驚いた声をあげる。感情の起伏がはじこ白雪にしては珍しかった。

「どうしたんだ？ 悪質なチートプレイヤーに遭遇したのか？」

「……当たつてた」

「は？」

ゆるゆると白雪がディスプレイから視線を外し久遠の方を向く。そのままディスプレイを指差すと、こう言つた。

「『HELIIX ONLINE』の募集に、当選してる……」

久遠は状況が全然つかめないままパソコンに近寄りディスプレイに表示されている文字を目で辿つた。

『このたびは我がヘリックス社の募集にご応募してくださり誠にありがとうございます』

貴方様はこのたびのオープン テストに当選しました。

それに際し、ヘリックス本社への入場証明書を配布いたします。それをUSBメモリなどに保存して本社にお持ちいただければ晴れてご入場することができます。

では、八月一日にお会いいたしましょう。』

久遠は感動した。この幸薄そうな少女はやはり幸せをこれでもか

ところほどに内包した存在だということを…

「よかつたな白雪ー これで久しぶりの外出が出来るなー。」

「…………喜ぶ方向が、絶対にずれてる」

わしゃわしゃと白雪の髪の毛を撫でると恥ずかしそうに上目遣いで久遠を睨んだ。まつたくもつて迫力がないどころか、可愛らし過ぎて逆効果である。

白雪は喜ぶ表情を見せなこままマウスを操作して画面をクリックする。

すると、白雪が、「あ」と今度は先ほどより驚いた声をあげる。感情の起伏がえしい白雪にとつて、結構な大事件であるらしい。

「どうした？ 大魔王が一〇〇体出でくるとかいうバグでも発生したのか？」

「…………当たつてる」

「は？」

ゆるゆると白雪がディスプレイから視線を外し久遠の方を向く。そのままディスプレイを指差すと、こう呟つた。

「『HELENA ONLINE』の募集に、もう一通当選してる…」

久遠は状況が全然つかめないままパソコンに近寄りディスプレイに表示されている文字を目で辿った。

そこには、先程と同じ文面と違うパスワードが書かれた当選通知が表示されていた。

白雪と顔を見合わせる。

すると、白雪は悪びれた様子は全くなによつてひづった。

「……アカウント千個作つて、それ全部、応募したから」

「……で？ どうすんだよ！」。多分オークションにかけたら〇〇万は堅いと思つた？」

「アニキが、くればいい。一人で行くの、ヤだし……だめ？」

無表情のまま首を傾ぐ白雪。思わず抱きつきたくなる衝動を抑えながら、久遠は夏休みの計画表を頭の中に思い浮かべる。

真っ白だった。

思わず涙ぐんでしまつほど、計画表なのに表すら作られていない白紙の紙しか思い浮かばなかつた。高校一年生にしてこれは酷いとも自分では思つてゐるが、無いものは無いのである。

彼女でもいれば話は変わつてくるのだろうが、如何せん久遠の学校での通り名は『残念な人』。格好いいのにシスコン過ぎて評価が駄々下がり、残念、という意味が込められている。

黒い髪に黒い瞳。逆卵型の綺麗な輪郭。身長も一七五センチとちようどいいぐらい。

本当に、残念な人である。

そんな残念な人が一つの選択肢を与えられた。

『誰もいない家の中で一人テレビに向かつている』のか、

『我が身よりも可愛い妹と一緒に少しばかり興味のあるゲームを体験する』のか。

答えは決まつてゐる。

「じゃ、着替えとか準備しなきゃな」

「…………」

両親のいない二人は、一人だけの小旅行に出かけることにした。

第一話・残念な兄とオタクな妹（後書き）

「」感想」「批判」「指摘、お待ちしております。

八月一日。ヘリクス社へと向かう送迎バスに乗り込んだ一人。それまでに何のトラブルも無かつたと言えば嘘になる。

燐々と照りつける地獄の陽光が引きこもりでオタクな白雪の体力をガンガン削つた。それ以前に一週間の体験で必要な着替えなどを詰めたリュックサックが持てず崩れ落ちた。そのままに以前に、引きこもりでオタクな彼女は外出用の服などどこにもなく、あるのはコスプレ衣装のみ。あえなく、久遠の小さめの服で我慢することとなつた。

そのバスの中で意外な人物と出会つた。

「トノ？」

「ん？ おー、久遠じゃねえか。つて、オイ！？ なんでお前がこのバスに乗つている、お前興味ないから応募しなかつたって言つてたじやねえか！…」

周りのことも考えず叫び散らすのは久遠の友達である古沢殿広。
ふるさわとのひろ
茶色に染髪した短髪にキリッと絞られた黒の瞳。耳にはピアスがつけられている。学校での通り名は《残念な人次席》。カッコいいのにゲーム廃人になりかけという残念なお方だった。

「いや、白雪が千通りに応募して奇跡の一人分ゲットという偉業を成し遂げ、さらに僕にはまったくもつて夏休みの予定がなかつたという悲しい現実だからだ」

「それは嬉しいのか悲しいのか分からねえな……ん? もー、白雪ちゃんちーつす!」

「ちーつす」

一人はネトゲ仲間だ。たしか、HOではクランを率いていた団長と副団長の間柄のはずだ。殿広を家に招待したときは、若干喋り方に温度差はあるものの一人でゲームについての話に華を咲かせていたのを覚えている。

そのとき、久遠は一人テレビに向かって話しかけていたわけだが。それはいいとして、殿広が久遠と白雪の前の座席に座る形になつた。

その前座席の背中のネットには今回のオープン テストに関しての軽いのか重いのか、よく分からぬ説明がぎつしりと、それでいて分かりやすく書かれているパンフレットが差し込んであった。

今回の テストに関してはアバター製作は行わず、参加する個人の個体情報をそのまま適用するらしいとのこと。サーバー負荷軽減のためにもよろしくお願ひしますとのことだった。それについて久遠や白雪、殿広はまったく困らないが、あたりから、「えー」やら「まじでか」などという言葉が聞こえてくるあたり、それを期待していた人も多数いるようだ。

今回の テストの実施期間は一週間。八月一日から八月十五日まで。そのあとのアイディア募集などの日程が一日ほど組まれている。さらに、今回の目玉となるVR機能。そしてもう一つ、今日まで知らされることのなかつた事実。

自立型AIの導入。ようするに、NPC^{（ノンプレイヤーキャラクター）}が定型文句だけではなく、その場に応じて言葉を発したり行動をとつたりする。

それがどれほど凄いことなのかよく分からない久遠だが、殿広が前座席で、「マジSUGEEEEEEE!!」とか叫んでいるので

凄いのだろう。かつての村の入り口の御爺さんが『イーローラーの村じゃ』だけじゃなく、他の言葉を話したり世間話をしたりできることがあるんだ。それが血口完結した久遠。

「田舎、ワクワクしてきたか?」

「……うん。ナビ、アーキはまつもじおつ?」

「まあ、そうだね。よつするに現実世界と変わらないんだろう? だったら、そんなに興奮もしないよ」

「ケツ。カツココのお兄さんとは言つしが違つねえ」

そんな兄妹水入らずの会話に割り込んだ見知らぬ女性の声。どうやら殿広の隣に座っているらしい。前座席を覗き込むと、この野郎。マジで世界つて理不尽だし」

「あのー、どうも今まで?」

「紗雨奈。百々露木紗雨奈。当て字としか思えない名前を持つ冴えないゲームーだし。ゲームーなめんなコンチクショウ」

百々露木紗雨奈と名乗った女性は、髪の色をピンクに染め、一日一体何時間ゲームをやっているんだといつもど隈が凄い女性だ。ふわふわとした桃色の髪を後ろで結つていて、その顔が全部見えるが、目元以外は可愛らしいものだ。おそらく自分たちと同年代だろう。

「よのしへ紗雨奈さん」

「よろしくイケメン」

「イケメンなら君のとなりにも」

「うつさい黙れ。どうみてもあたしと同種の人間だらうが」「結構傷つきましたよ！　その言葉でオレの、殿広のＨＰバーは大きく削られましたよ！」

一ゼロにして始まりの街に戻りやがれ」と

「……はっ！ もしやこれはあれか？ フラグという奴か？ この後オレがこの娘を助けに颯爽と現れ、この娘がキュン死するフラグかオイやつたぜやつとオレもリア充の仲間入りに」

「ならねえよ！一生かかってもならねえよ！たとえ一万のドラゴンに囲まれたとしても、それだけはねえよ！」

どうやら『夙』が合う仲間が出来たらしい。

久遠の夢も自然とほんの少し

ゲームもなかなか捨てたもんじやないと再認識させられた久遠。だが、やはりあまり好きにはなれない。『あの事件』がずっと頭の中に残っている。

「アキ? 暗い顔、どうしたの?」

「ひやら顔に出ていたみたいで、それを心配した白面のぬまつとした可愛らしい瞳が久遠の顔を覗き込んでいた。

今は、そんなことを考えるべきではないだろ。」

せめて級友たちにする白慢話ぐらいは持ちかえらねば。

そのとき、アナウンスが入った。添乗員の女性が礼儀よく、悪く言えぱマーコアル通りの言葉を紡ぎだしあじめた。

『Hのたびは、H選手におめでとうございます。まずは口程の御確認と』

それから十分ほど経つと全て説明し終えた。『あとはHもつくりお過ごしくださ』こう言葉とともに周囲の人間がHに期待を寄せてわらわらと話しあじめた。

前座席に座っている一人もゲーム同士、やはり話が合つりしこ。喧嘩腰の中にも、時折笑い声が聞こえてくる。

「アニキ。やつぱり楽しそうじゃない」

「そんなことないよ。これでも結構わくわくしてるんだぜ？」

「ほんとほんと。そんなことよつ、白雪はHのゲームに結構詳しい

んだろ？ どんなゲームか教えてくれよ」

「……うん」

どうやら話しが逸らすことが出来たようではつと胸を撫で下ろす久遠。そんなに顔に出やすいタイプなのだろうか。もししくは、白雪の観察力が鋭いのか。

「わたしは、『魔導師』の職業を選んでた。Hには数えきれないぐらい職種があつて、そのどれもがレベルをあげるとランクが上の職種に派生する。『魔導師』は、魔法を主に使う職種で、最高ランクが『古代魔導師』……レベルをランクまで上げなくなれたけど

「魔女っ子白雪……やばい、可愛い」

「話しづらいな……。アニキは、どんなのがいいの？」

「うーん。やっぱ前衛でズバズバやつてるほうが性に合つだろ? それに魔法使うにしても呪文とか使わないといけないんじゃないか? MMOのときはコントローラー操作だけでよかつたかもしかりけど、VR MMOだと自分で呪文唱えないといけないんじゃないか?」

「……不覚。アニキがわたしより先に気付くなんて……。馬鹿っぽいのは、見た目だけ?」

「辛辣だなオイ」

一人はぼつぼつと言葉を交わしていく。大体は久遠が知らないことを白雪に聞くといつ形なのだが、それに白雪は鬱陶しがらずにちゃんと答える。

微笑ましい兄妹の図の完成である。

前座席に座っている紗雨奈はイライラしたよつて歯噛みする。

(兄妹のくせにイチャイチャしやがってクソリア充が。だからリア充はリア充なんだよ。もはや恐怖の対象だし。どうやつたらそんなリア充になれるか講座開いてくんないかしら)

「だーもーー イライラするーー」

「リア充リア充ぶつくさ言つてたけど、大丈夫か? なんならオレがお前をリア充にしてやつてもいいけど」

「うつさいチヤラ男! 本当はモテるのにオタク然としてる奴が結

構嫌いなんだよあたしは…

「紗雨奈も結構モテそうだけど？」

「皮肉か？ 皮肉なんだろ」

白廟氣味に笑う紗雨奈に対して殿広はやも近たり前かのようだ。 「いや、紗雨奈かなり可愛こじやん。田のトの腰も、チャームポイントとして数えれんじやねつてぐりー」

「な、な、なな…？」

口をパクパクさせながら顔を真っ赤にする紗雨奈。 たしかに、それぐりーには可愛い。 性格以外は、いや、性格もアクセントとして数えられるぐりこは可愛い。

（お、落ち着けあたし。ナンパだ、ナンパをされている。い、い、いつ言つ時の対処法はえつと、うんと……）

「な、ななななななな、なめてんじやねえぞ…」

「舐めるか。舐めて欲しいんなら舐めてやるけど…」

「へ、変態！ 軟派！ 女つたらじー。」

「いや。だからオレ彼女いないし……そんなにオレの黒歴史をいじつて樂しこのかーつ…。」

素だ。素で軟派だ。 そう思つた紗雨奈だが、やつぱつ口の方は止まらず、

「げ、ゲームーなめんなよー！」

「だから舐めねえし！ そして舐めて欲しい場所があるならこれで
もかといつほど舐めてやるが？ ん？ ビーッしたんだよ急に黙つて
げぶツ！？」

「変態、一度と起き上がりくんなし」

三時間後、飛行機に乗り換えた場所でまたバスに乗る。そ
れから一時間ほどバスを走らせると、

『見えてまいりました。あれがヘリックス本社でござります』

添乗員の女性がキー ボードで打つたような正確な言葉を紡いでい
く。

バスに乗っていた三〇人強の視線が外へと向けられた。
特異なフォルムの建物だ。全体的に白色で、三角形や円形、球体
などを組み合わせたような遊び心溢れる巨大な建造物。

『HELIIX COMPANY』

彼らが待ち望んだ、桃源郷である。

第一話・HELIX COMPANY（後書き）

「J感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

あれから社内に案内され、会議室のような場所に通された。どうやらあのバスに乗つっていた人間同士が小規模のグループらしい。大体、四〇人程度が乗つていたので、他の部屋があと九九部屋もある。

そして、

『人にちは、みなさん。イハ・マーゲというのだ』

大きな画面に映し出されたのは、『HELIX ONLINE』をしていたものなら誰もが知る男の姿だった。もう四〇を半ばとしているはずなのに、眼鏡をかけたその奥に潜む瞳にはいまだ若き光が宿っている。

それこそが、小さな会社をオンラインゲーム最大手の会社にした力なのだろう。

『今日は私が手掛けた「HELIX ONLINE」のテストと
いうことで集まつてもらつたのだが、みなさんはゲームが好きかな
?』

「...」

久遠の隣で殿広が奇声を発した。

『それはなによりだ。これからみなさんに体験してもらうのは、そういうたゲームの最先端。VRMMORPGというのだ。……ふ

ふ、これ以上説明するのも億劫だね。さて、神谷君。テスト試験場に案内してやつてくれ『

「かしこまりました

神谷と呼ばれた女性は、「忘れ物が無いようお気を付けください。それでは、ついてきてください」とにんまり笑顔でゲーム四〇人程度を引き籠めて部屋から出た。

『……ふふ。私も、開発するだけではなく、久々にゲームをしたくなつたな』

心底楽しそうに、イハ・ゲームはこつこつとほほ笑んだ。

大きな部屋。そこには四〇ほどの椅子が用意してあり、その傍らには小さな円形テーブル。そしてその上には、

「こちらが、『ダイブデバイス潜行装置』です。これを頭部に装着し、二つの電極を首筋に張り付けてください」

スーツを着た茶髪の女性、神谷がヘッドギア型のそれを手にとり説明した。

殿広と紗雨奈はわいわいがやがやと久遠と白雪の二人を置いて先に装着してしまった。

「ん、じゃ、白雪。ゲームの中で」

「アニキ、それ禁句。現実世界と考えなきや、面白くなくなる」

「はは。はいはい、じゃ、また」

「うん」

隣同士の椅子に座る久遠と白雪。

神谷に言われた通り、頭にヘッドギアタイプの『潜行装置』ダイブデバイスを被ると、次の指示を待つた。

目から耳、鼻のあたりまで完全に隠されている。それが若干の不安感を抱かせる。これが小規模でほぼ無名の会社だったなら逃げ出していることだらう。大手の会社で信頼があるからこそ、出来るのだ。意識が落ち、次に目が覚める時には、クロードです

若干の興奮と若干の不安が入り混じる。

指先でボタンを弄くりながら、最後まで久遠は悩んでいた。周囲の人間が次々と仮想現実の世界に落ちて行く中、久遠は最後まで押せないでいた。

「どうしたのですか？」

そんな様子を心配したのか、神谷の声が暗闇の向こうからかけられる。いきなりのことだったので方がびくりと震れる。

「少し、不安でして」

「ふふ。私もそうでしたよ。なんせ、機械に全てを預けるわけですから。こちらの世界に戻つて来れないかもしないという不安感はあります。二十一世紀末といつても、まだまだそういう事故が絶えませんから」

「どうやら、神谷は一足先に体験済みのようだ。それもそうだ。までは、安全を図つてからではないと世に売り出すことはできない。しかし、久遠の心配はそこではない」

「失礼しますが、あなたのお名前は？」

「田比谷久遠です」

「……田比谷、さんですか。もしかして、あの《事件》の？」

「…………、」

「どうやら、神谷も知つているらしい。それもそうだ。一般社会において、あの《事件》は大した問題にならず、新聞の隅の見出しに小さく紹介された程度の事件だったが、こういつたゲーム関連の会社ではそれなりに有名だ」

「……はは。そろそろ、行つてきます」

「あの、」

神谷は何かを言おうとしたが、久遠は気にせず右側頭部のボタン

を押した。

カシュン、という空気の抜けるような音とともに、体に軽い電流が流れる。急速に意識が闇の底へと沈んでいく。

あの『事件』のとき、両親は静かに彼を見下ろしていた。それ以外のことは、憶えていない。

急激に浮上していく意識。例えるなら、爽やかな朝の起床といったところか。倦怠感などない、むしろ普段よりも清々しい感覚が体を満たす。

ゆつくりと、田を開いた。

そこには、久遠の全く知らない世界が存在していた。

「……ここが、『クロード』」

そこは大きな広場だった。周囲にはごつたがえすほどの人影。しかし、そのどれもが見慣れない格好をしている。久遠も自分の体を見てみると、現実世界ではありえないような格好をしていた。

どうやら、最初期の服装はランダムに設定されるらしい。久遠の服装は白いワイシャツのようなものの上に茶系のジャケット。藍色のジーンズの様なものという私服然としたものだった。だが、要所に見える武器を提げるための装飾があつたりと、現代風の冒険服といったようなものだった。

もう一度あたりを見回すと、やはり、不思議な世界だと思つ。街灯が宙に浮かんでいたり、おそらくNPCと思われる人影の中には異形の者がいる。

手を握つたり、その場駆け足などをしてみるが、全く違和感がない。動くたびに髪の毛の一本一本まで正確に動くし、頬を撫でる風は本物のように感じる。

他のプレイヤーたちもその感覚に興奮しているのか、およそ四千人のざわめきが大きな広場を埋め尽くしていく。

「アニキ」

不意に横からかけられるぬぼつとした声。聞き慣れたもので、すぐには誰の声か分かった。

「白雪？」

なんだか最初から職業が決められているような黒いローブに身を包んだ白雪の姿があった。まるで男モノのシャツを着た女性のようでは、なかなかに来るものがある。

「…………ここは、『始まりの街』だと、思つ」

「…………ネーミングセンスは無難なんだな」

「（）で、最初の職業を決められる。わたしは『魔導師』にするけど、アニキは決まってる？」

「『剣士』、かな？ 多分」

「…………ウルトラ普通ブレイザー。『剣士』は普通すぎて最後らへ

んにはほとんどどこなかつた

白雪が『分かつてねえな』といつ分かつてねえよ』みたいな田でため息をついて少しむつとしたが、可愛い妹の言つことなので許容するにじっとしてたらしい。代わりに頭を撫でる久遠。

「ん……じゅ、行」

「ん? そういうや殿広と紗雨奈さんば?」

「先行つたんじゅない? 実は、わたしもアーティキを見捨てて先に行こうとした」

うふふ、と軽く微笑しながらとんでも無いことを呟いた白雪。何も知らない久遠がこの世界に取り残されたら、テスト一日田はこの広場でぼーっと過ごすしかなくなる。

「じゃ、『大神殿』」

「あの大きな建物か?」

「うん」

白雪がゆるゆると指をさした先、広場の中央にある噴水のむこう側には石やステンドグラスで彩られた神殿と形容すべき巨大建造物があった。他のプレイヤーもそこに向かってじゅうじく大混雑が予想される。

自立型AIを導入したといつとは、そこは司祭などは荒てふためいたりするのだろうか。一人で四千人を相手にするのは本当にきつこと思うが、まあ頑張つてほしいものだと久遠は願つ。

「みんなも職業は決めてるらしいから、思った以上にすぐ終わると思つ」

「……それにもしても、どのゲームにも説明キャラは付き物だけど、このゲームにはいないんだな」

「わたしが、なつてあげるから。みんな大体パンフを読み漁つてるとから。アニキ、サボり」

「大丈夫。メニュー画面の開き方ぐらいは見た」

久遠はそういうと右の人差し指と親指を合わせて勢いよく開いた。すると、透明な薄緑色をした画面が空中に展開される。そこにはユーザー名とレベル、ステータス表示や、あとログアウトボタンなどが存在していた。画面の両端を指で摘まむと、パソコンのウインドウのように広げた縮めたりできる。

久遠は今別にいじるのも無いので、closeのボタンを押した。

「ふふん、どうだ……つて」

「アニキ、なにしてんの？……遅いよ」

完全無欠に無視をされた。

久遠は苦笑いしながら、白雪のあとを追つた。

「はあ、はあ……貴殿は、どんな職業にするのだ？」

「…………、」

息を荒げるＺＰＣ、もとい同祭。ビームからどう見ても、生きた人間にしか見えない。

どうやら久遠たちが一番最後らしく、その田には希望を満ち溢れていた。最先端技術の恐ろしさを田の端たりにした。

「わたしは、『魔導師』」

「了解した。……神よ、そのチカラを以つて、この者にその加護を授け給え。魔を律する、その加護を」

「ポウ！」と、白雪の体が淡い光に包まれる。これ 자체でもう興奮するしかないのだが、あまりの出来ごとに絶句した久遠。人間、眞に驚くと言葉が出ないのだ。

白雪も涼しい顔をしているものの、本当は興奮しているのだろう。小さな白い手をぎゅっと握りしめていた。

「お、終わった……これから精進されよ」

「うん。おつかれ」

「…………ぐす」

見た田四〇代後半の男性が涙を流す姿はなかなかにシユールなものだった。NPCにここまで感情があると、とても不気味なものがある。彼らは、この仮想空間の中で確かに生きているのだ。

「貴殿は、どの職業にするのだ？」

「《剣士》」

「……ふ。普通だな」

「噫いなし」

「どうやらパンフにあった通り普通に言葉を交わすこともできるらしい。ますます人間だ。

「神よ、そのチカラを以つて、この者に加護を与え給え。武を振るう、その加護を」

白雪と同じように久遠の体が淡い光に包まれる。
体に、不思議な感覚が染み渡つて行く。腕力が強くなっているような、素早く動けるような、そんな感覚。

「これから精進されよ」

久遠の田に、初めて司祭の姿が神聖に映つた。どうやら、ただの説明キャラではないらしい。

「なにか、失礼なことを考えてはおられまいか」

「は、はは。い、行くか白雪」

「……うー」

どうやら、勘とやらも働くらしかった。本当の人間だ、これでは。よもや、スカ・ネットみたいな反乱が起こらなければいいが、そんなことを本気で心配する。

「アニキ、とりあえずは、始まりの平原とかについて、動作確認」

「ん、そうだな」

「そのまえに、メニュー画面開いて。どんなスキル使えるか確認」

「そ、そうだな」

白雪に促されるままに親指と人差し指を合わせ、勢いよく開く。開かれた半透明の画面を指でタッチしスクロールさせ、ステータスのところをタッチする。

『田比谷久遠 L/V1』

【職業】

・『剣士』

剣士派生の最初期職業。平均して安定したステータスを誇る。

【スキル】

・『ツバメガエシ』

剣を振り抜いた直後に硬直無しで斬り上げる。

「……『スキル』ってのは、最初貰えるモンは人それぞれだつたりする?」

「する

「そうか。けど、剣って言つても、剣を持つてない剣士か。徒手空拳で手刀を駆使して戦つたりするのか?」

「最初に一万一二ゼガ支給される。それで装備を整える」

「じゃ、行くか」

「うん

「のわッ!?

『始まりの平原』と呼ばれる場所に二つの人影と、四足獣の影が差す。

襲いかかってくる黒い狼のようなモンスターの攻撃を間一髪のところで避ける。H.Oではある程度のリアリティを持たせるため、ある程度の痛覚がもたらされるらしい。

それも、興奮を掻き立てるための促進剤のようなものなのだろうが。

「アニキ、それ雑魚。動きは少し速いけど、単調な攻撃しかしてこない」

そんな様子を少し離れたところから傍観する白雪。
そうは言つても、久遠は別に現実世界で剣道をやつていたわけでもなく、単調といつても癖なんかがこの短時間で見つけられるわけも無い。

「グルウア！」

「のハシー？」

せりに武器屋で買ったこの《アイアンソード》といつ剣。若干細身ではあるが、その重厚さに慣れなければ簡単に扱うことはできない。

「普通に振るんじゃなくて、システムに動作を任せるとこって言つてた。ようするに《スキル》を使つてこと」

「んなこと言つたつて」

どうやって使えばいいんだよ具体的に！ といつ叫び声は完全に無視される。

そういうふうに考へていて、白雪のいつといつの単調な動きでまたも黒い狼が飛びかかってきた。

ゲームなんだから そんなふうに考へようとしても、田の前に迫る牙や爪は本物のように感じられ、敵意すら感じられる。

しかし、もうそれは割り切ることにしたよつで、黒い狼 ウルフインの攻撃を正面から受け止める。体格差からか、それともプレイヤーとモンスターとの地力の差か、結構簡単に押し返すことが出

来た。

押し返されたウルフインは低く唸ると少しの硬直が出来る。
勝機ツ

そう思った久遠はアイアンソードを振り上げ『アツブ』と呼ばれる機能を使つ。漫画やゲームのよう(ここがゲーム)というのは置いておく(一步踏みきることで距離を詰めることができる機能だ。プレイヤーのステータスによつても速度が変わる。もちろん、それもプレイヤーの脳から送られる電気信号をもとに行われる。

そのとき、ウルフインの硬直が解けた。それと同時に久遠の攻撃が振り下ろされるが、上へと飛びあがることによって避けられてしまつた。

「《ツバメガエシ》！」

瞬間。硬直も無しに細身の剣が刃を返し、まるで燕の急上昇のように斬り上げた。空中で動作を取れないウルフインはそのままその刃を首筋に受けた。

そのとき、ウルフインの上のライフゲージ 緑色の棒 が一気に消えてなくなつた。ウルフインの体が無数の光り輝く光子に分断され、虚空へと消えていく。その後に残つた鋭い牙。久遠がそれに触ると《ウルフインの牙》という表示が出て、虚空に消えて行つた。

「おめでとう、アニキ。アイテムは触れたら《ポーチ》に送られるらしい

「……ふはあ！」

そこで一気に緊張の糸が解け、その場に座り込んでしまう。柔らかな緑草は久遠の緊張で凝り固まつた筋肉を優しく包み込んだ。

「なんか、精神的に疲れるな、このゲーム」

「慣れると、綺麗にコンボを決められる。アーティの経験不足。最初はそんなモノ。焦ることは無い」

「ふーん、そんなモンなのか。てっきり最初から無双出来るモンだとばかりに」

「ゲームは、そこまで甘くない」

でーんという効果音が聞こえそうなほど堂々と言つた白雪だが、本当は胸を張るようなことでもない。それじゃあ娯楽の意味無いじやん、という久遠の当然ながらの疑問はまたも無視されたのだが。そんなとき、今度は一頭のウルフィンが近づいてきた。

久遠の今の実力では一頭同時に相手にしたら確実に『始まりの街』に転送されることになるので、必然的に白雪が動くこととなる。

「白雪、いけるか?」

「当然。アーティよりスマートに勝てる」

全然嬉しくない受け答えだったが、頼もしいではないか。現実世界でもこのぐらい活き活きしてくれたらいいな、と久遠は栓なきことを考える。

白雪は片手杖、木で作られた『オーパスタッフ』を構える。

H.O内において『魔導師』の初期スキルの数は他の職業に比べると多い。そうでなければ单発系の魔法を延々と放つしかなくなるのでそういう仕様になっていた。

魔法があるということはMPがあるのかと言われば、あるのだ。マジックポイント

ライフゲージの下に青い棒 ソウルゲージと呼ばれるものがある。
それが便宜上、MPと同義だ。

「燃えよ、《ファイア》」

そう唱えることことで拳大の火の玉が空中に現れ、一直線にウルフインに襲いかかる。しかし、自立型AIの導入は伊達ではないようで、前作では避けるという動作をとらなかつたウルフインが横に飛びのきやり過ごす。

白雪の頭の上のソウルゲージがわずかに減った。その程度の威力の魔法ということだ。

久遠もいつまでも傍観しているわけにはいかない。もう一頭、ウルフインはいるのだ。

彼は苦笑いしながら白雪と視線を交差せると、アイアンソードの柄を力強く握りしめる。

案外、ゲームとは楽しいものだつた。

第三話・体験（後書き）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

十月十四日。

主人公の服装を変更。

一週間という時間はあつといつ間に過ぎ去った。

この一週間で久遠はこのゲームのことをあらかた理解し、どんなふうにすればいいかぐらいは分かつていて。それでも、前作経験者である白雪のようなプレイヤーとは壁があつたが。

しかしこのゲーム、進行度が馬鹿みたいに遅い。一週間もあれば携帯ゲームのソフトであればクリアできるだろう。

一週間たつてもまだまだ《始まりの平原》周辺でしか活動できず、あまり奥深くに戻ると強力（？）なモンスターがいて、気を抜けばすぐに《始まりの街》に転送されていた。ちなみに、転送先は《大神殿》内部である。

「レベルは、20か。結構上がったのがどうか分からんな」

久遠は一人メニュー画面とこちらめつこをしていた。

スキルの数も増え、《ツバメガエシ》の他にも《スパイク・アウト》と呼ばれる縦振りからの突き攻撃や、《ソウル・エッジ》と呼ばれるソウルゲージを消費して出す初級にしては強力なスキルも手に入れられた。

それぞれのスキルや職業には熟練度なるものが存在し、それを全て貯めると新たなスキルまたは職業の解除条件になるらしい。

一週間も経てば久遠の周りには下位の職業を使っているものはほとんどないなかつた。誰もが少しでも多くのことを味わいたかったのだろう。

「それにしても、白雪にどうどう置いてかれたか。まあ、いいんだけどね」

久遠はそう呟きながら柔らかな緑草の上に寝転んだ。穏やかな陽気の下、気持ちの良い風が彼の髪の毛を柳のように揺らせる。

白雪は、三日ほど前から久遠を置いて他の街を田指したり、未知領域^{ンフランク}と呼ばれる部分を踏破しに行き出した。

まあ、ゲームの中なので何の心配もいらないと思い、久遠はこうして一日を過ごす日々を送っている。気が向けばモンスターを倒すし、気が向けば街の中央にある掲示板でクエストを受けて暇を潰す。驚いたのは、この仮想空間内では食事ができるということだろう。本当の体に栄養は送られないのだろうが、味は感じられるし腹は満たされる。

暇潰しとは言つても、モンスターとの戦闘は結構なスリルが味わえるし、現実世界では味わえないような爽快感もある。

前作ではこれほどではないにしろ、それなりの爽快感はあったのだろう。不覚にものめり込む気持ちも分からぬでもない。

「だけど、所詮は《ゲーム》なんだよ。履き違えちゃ駄目なんだ」

所詮はゲーム。ゲームに聞かれたら集団リンチ確定である。それに自立型AIを導入しているということは、NPC^{アシノウ}だつてほとんど生きていると言つていいだろつ。

久遠は体をばねのようにしならせ起き上がる。

この世界も、どうせ今日でお別れだ。思い入れなど大してない。発売されたら白雪が実費で買って終わり、そんな感じだ。

そろそろ食事の時間みたいなので、どのコーナーたちもログアウトしていることだろう。

久遠もメニュー画面を開き、画面の一一番下にある《LOG OUT》のアイコンを押そうとした。

「…………？」

ない。その文字が、ない。
つまり、どういうことだ？

「…………ログアウト、不可？」

誰かに頼らうと思ったが、知り合いどころか人影すらない。それもそのはず。『始まりの街』周辺には久遠のような前作もしたことがない、それどころか応募だつて興味本位でやつただけのゲーム初心者しかいない。

「…………はい？」

頭がきゅんきゅんし始める。理解不能とはまさかのことか。

運営 ヘリクス社の、それも本社でこんなことが起るのか？異常事態があればすぐに解消されるはずだ。外部からの操作で何とかならないなら、物理的に、そつ、『潜行装置』を強制的に外すといった方法もとればいいの。

「…………なにが、起つていい？」

「社長！ 外部からの操作ができなくなりました！… 多くのプレイヤーから苦情が殺到しています！」

「……『ダイブデバイス潜行装置』を外すしかないか」

そのとき、ヘリックス本社内部の全てのモニターが何者かによつてハッキングされた。

そこに映し出されるのは、

「……ハーカス？」

それは、一〇年間誰一人辿りつけなかつたH.Oの最終ボスじとうひ。それが、ニッコリと笑つて画面の中から現実を見つめていた。

突如、弄くつていたメニュー画面にノイズが走る。いよいよつておかしくなつたかと思い、グーパンやらなんやらしてみるが一向に変化なし。

数秒後、ノイズが明けて行く。

そこには、銀髪碧眼の、少年が映し出されていた。

『やあ、みんな。『HELIIX ONLINE』は楽しんでるかな？ 自分の名前はハーカス、所謂ラスボスだよ』

いきなり、ラスボスの出現。何の冗談だろ？

もしや、イハ・マーゲのサプライズイベントなのだろうか。『テスト被験者だけに一〇年間明かされることのなかつたラスボスの姿を明かしてあげようふつはつは』といつイベントだつたりするのなら、久遠としてはハタ迷惑である。

『突然だけど、人工知能の反乱、とか言つたらどうすの?』

「どうもしないけど」

『はは、やこの君、面白いねえ。じゃあもう一つ、このゲームをクリアするまでログアウトできない、なんて言つたらどうする?』

「こちらをわざと挑発するよつな口調で絶望するよつな言葉を吐くハーケスといつ名のノル。』

なんてことになつたら、どうするのだ? いや、強制ログアウトといつ方法があるはずだ。たとえば、『ダイブデバイス潜行装置』を、

『それはやめといた方がいいね。ボクはこれでも外にも協力者はいるんだぜ? ああ、違う違う』

どうやつてだ。どうやつて情報の塊が意思を持つて外部の人間とこんなことを起こす。

意思?

「まさか、自立型AI……?」

『そこの君。頭いいね、仲良く出来そうだよ。そう、ボクはそれで進化したんだ。学習し、学習し、もう人間の手じゃどうにもできないうるいのスペックを持つぐらしに。世界一のハッカーでも連れてきなよ。一瞬で挫折させるからさ』

「けど、そんなお前がどうやって人間と「コンタクト」を

『クスクス。それは秘密だよ、協力者、いや共犯者って言うのは互いの情報は漏らさないものなのさ』

心底楽しそうに、あまつさえ腹を押さえながら鈴のよつよつ笑う。

「強制的に外そいつとしたら、どうなるんだ？」

『君は勇気があるね。他のプレイヤーたちは口開けてポカーンなのに。そうだね、首につけた電極からある種の電波が発信されて、脳細胞を焼き切る。内臓もある程度焼くね』

「…………死？」

突きつけられたのは、限りない死の可能性。

『ん、心臓の鼓動にやっと乱れが生じたね』

当たり前だ。久遠は高校一年生。どこにでもいる普通の高校一年生だ。普通に死ぬことは恐いし、それで足も震えれば心臓だつて乱れる。しかし、それ以上に疑問に思ったのは、このNPCが人工知能を手に入れてまでやりたかったことは一体何なのだろうかということ。このゲームの中に自分たちを捕えてどうするつもりなのだろうか。

『クスクス。こっちだつてクリア条件を『えない』というわけではないさ。クリア条件は、ボクを倒すこと。そしたら、解放してあげる

よ。ま、途中でライフゲージがゼロになつたら、死んでもらつんだ
けどね』

『の存在は、自分たちにどれだけの時間ゲームの中で過ごせとい
うのだろうか。普通のゲームでも一〇年かかるても全てをクリアで
きなかつた。さらに、そこにリアリティが、死というリアリティが
追加されればどうなるか。

もちろん、足がすくんで動けなくなる。

『これは全世界に放送されてるから、大ニュースになつてるよ。ホ
ント、人つて人の不幸が大好きだよね』

「ちょっと待てよ、僕たちの本体はどうなんだよ

『ああ、言つて忘れてた。今から猶予時間をあげよう。その間に病
院の生命維持装置にでも繋いでやってくれよ。ねえ？ イハサーん
？ そのあとからゲームスタートだぜ？ もちろん、命がけの
ね』

久遠は、勢いよくメニュー画面を閉じた。手の中でポリゴンが蠢
いているのを感じる。

やることは見つかった。

あいつの戯言に付き合つていい暇などない。

「……まずは、レベル上げだ」

冷たく、そう言い放つた。

久遠は剣を握る。

まともりきらない中途半端なプロローグを見せられたかのような
そんないらつきを覚えながら。

「グルル」

見慣れたウルフインの姿がある。最近では五頭同時に戦つたとしてもかすり傷すら負わなくなつた相手だ。

しかし、今はこんなにも強い相手に見える。いや、畏怖ではなく、恐怖の対象になつた。

それでも、久遠は

それで、久遠は立を止まれない。味を、白雪を、死なせるわなこは、

妹を、白雪を、死なせるわけには、いかない。あの、『』のあと、なにがあつても守り抜くと決めたのだから。

「待つてろ、白雪。お兄ちゃんが、今行つてやる」

一つの影が交差する。

片方の影は残り、片方の影は無数の光子となり、虚空に消えた。

少年は大地を踏みしめ、一步前へ踏み出す。

これが後に『反乱』と呼ばれる、大事件の始まり。

第四話・反乱（後書き）

「J感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

あれから、プレイヤーたちはいくつかのグループにまとまつた。グループといつても完全に統一した組織のようなものもあれば、大まかな理由で組織だつた行動をとらないグループもある。

一つは『攻略組』。積極的に世界に散らばる未知領域^{アンノウン・フレック}を踏破して、世界の地図の暗い部分を埋めて行き、最後にあのラスボスを倒すのを第一目標としている者たち。

そこの一一番の実力四人組^{クアドロ・クリアラーンス}と呼ばれるクラン。たつた四人ながら破竹の勢いで各地の未知領域^{アンノウン・フレック}を攻略しているらしい。

一つ目は『小安組』。あまりフィールドに繰り出さずに、街で前線に赴くプレイヤーのサポートを第一に考えるグループだ。街の中にいるからといって安心はできない。時々、モンスターが群れをして街を襲いに来るからだ。

彼らも戦えないというわけではないが、やはり前線を駆け巡る『攻略組』とは見劣りする。

そこで出てくるのが三つ目。『防衛組』。『小安組』よりもフィールドには出るが、『攻略組』とは大きな違いがある。それは、その拠点周辺のモンスターの駆除というわけだ。あまり街から離れず、拠点の防衛にその力を注ぎこむ。

この三つのグループは互いに利害関係が一致している。

現実世界に帰りたい、という利害関係が。

しかし、このほかに『無法組』と呼ばれるグループが出来上がっていた。

プレイヤーキラー

PKとまではいかなくとも、強引に路地裏にプレイヤーを連れ込み、所持品などを強奪したり、未知領域攻略の邪魔をしたりするグループ。『無法組』の思考は分からぬが、それは他のプレイヤー

たちとは違つ思想を持つてゐる。

だつて、それは現実世界への帰還を邪魔するものでしかないのだ
から。

そして、ある少年は、今日もまた一人でフィールドへと赴く。
いまだ、彼はある少女と再会を果たせずにいた。

残りプレイヤーは、三千五百人。

たつたの一年で、五〇〇人の人間が、この世界から姿を消してい
た。

「フッ！」

「……ツ！」

鈍く光る剣の刀身と武骨な巨大鎌がぶつかり合つ。オレンジ色の
火花がエフェクトとして飛び散り、松明の灯る暗い空間を一瞬ずつ
照らしていく。

金属がぶつかり合い、ギギギという耳障りな音を暗い空間に響か
せながら二つの影は何度も己の獲物を振るう。

片方は異形。《ダイイング》と呼ばれる死神のようなモンスター。
黒い襤褸衣のような外套の下には、血肉臓器どころか皮すらない白

骨。肋骨の中心には邪悪な熱を帯びる紫炎が揺らいでいる。手には全長四メートル前後の大鎌で、相対する敵の命を今にも刈り取ろうとしている。

片方は人型。黒いロングコートとパンツを着用している。手には黒い細身の剣を握っていて、それで以つて巨大な鎌を受け止める。

「ツー！」

ダイイングは鎌を竜巻のように回転させ少年の体をどんどん部屋の隅へと追いやつて行く。『リーバーズ』。ダイイングが使う驚異の一〇〇連続攻撃。鎌を扱う武器のスキルとしても上位のスキルだ。少年はバツクステップで避け、ときには黒い剣の腹で鎌の刃を受け流し難を逃れている。

ゴギガガギギゴガガギギツ！！と壮絶な連撃に顔をしかめながら、体に無数のかすり傷を創りながら、それでも直撃は避けている。あの『反乱』のあと、すぐにメニュー画面を閉じてしまった少年には知るよしもなかつたが、あの『ハーフス』というラスボスはゲームのシステムに若干の改造を施したらしい。

流血エフェクトと、痛覚の増大。去り際に残した言葉が『楽しそうでしょ』だつたらしい。

『ライフゲージ』頭の上にある緑の横線 がジリジリと幅を縮めていくのを肌で感じ取りながら、少年は勝機チャンスを待っていた。

今、ダイイングが使用している『リーバーズ』は上位スキル。上位スキルには大きな特徴がいくつある。一つは、その圧倒的効果。他の追随を許さない。一つは、その華麗なエフェクトグラフィック。そして

スキル発動後の硬直時間の長さ。

百発。この攻撃を受けければ、ダイイングには大きな硬直時間が訪れる。それこそ、少年の連続攻撃で殺せるような長い時間が。

ダイイングの攻撃、『リーバーズ』だけでなく、あの鎌から繰り

出される連續攻撃は、縦や横といった攻撃ではなく球という立体的な攻撃と捉えた方が正しい。鎌を振り回すだけではなく、まるで舞を踊るよつこ体を回転させるなどして滑らかな連續攻撃を放つてくるのだ。

(……九〇、九一、九二　)

鎌のヘッドスピードは一五〇キロを超えていた。にも拘らず、少年はその一撃一撃を丁寧に記録していく。この連續攻撃が唐突に終わってしまうとこちらが体勢を崩してしまう。それはあまり得策ではない。

ダイイングの大鎌が今まで以上に一際大きく振り上げられる。コンボファイニッシュだ。

少年はこの攻撃を避けずに、あえて剣で受け止める。そうすれば衝撃で、少なくとも一割のライフゲージが削られてしまうだろう。今まで削り取られてきたライフと合わせると、残りのライフゲージは一割を切るかもしれない。

しかし、避けた後の時間すら惜しい。少年のステータス面を考えるとガードしても相手の攻撃に押し切られることは無いはずだ。振り上げられた鎌の刃が、松明の不思議な光を反射させて鈍く輝く。

瞬間。ギュゴッ！！と空気の膜を切り裂きながら死を振りまく死神の鎌が少年の脳天めがけて振り下ろされた。

少年はそれを、真正面から剣の腹を使い受け止め、弾き返す。

スキル発動後の硬直と攻撃を弾かれたことによるよろめきが重なり合い、さらなる硬直時間を生んだ。

少年はダイイングのがら空きの懐 紫炎揺らめく肋骨部分、急所ポイントに潜り込んだ。そして、剣を横に構えると無駄のないモーションでスキルを発動させる。

横振りから蹴りも織り交ぜる一連続攻撃スキル『ランブル』。こ

の大チャンスにこのスキルを使ったのを他のプレイヤーに見られれば間違いなく馬鹿の烙印を押されるだろう。それはどんなに弱いスキルでもその使用直後には硬直時間が設定されているからである。こういう大チャンスの場合は小技の連続より大技を一撃ぐらい叩き込んだ方が効率が良いとされるのだ。

しかし、少年にはそのあるはずの『硬直』がなかつた。十分の一秒すらその硬直はあり得なかつた。

そこから少年のスキルの連打が始まる。

蹴りを入れた体勢のまま剣を振りかぶり勢いよく振りおろした直後に突き攻撃の『スパイク・アウト』。突きを入れたままの体勢で剣を跳ねさせて袈裟がけに切り捨てる。そこから滑らかに体重を移動させながらスキルを発動する。『ソウル・エッジ』、ソウルゲージを少し消費しながら剣の威力を増大させる下位スキル。蒼い光を帯びた黒剣が体重を乗せられたままダイイングの肋骨に食い込み両断する。

一気にダイイングのライフゲージが三割を割り込んだ。

「ああああああああああああああああああああああああああああッ！」

体中の酸素をかき集め最後の連撃を繰り出そうと裂喉する。

振り抜いた剣の勢いを殺すことないどころか、剣の遠心力に任せてさらに勢いを増大させる。剣の軌道を横から縦にクロールするようになって最後の一撃に力を込める。『ソウル・エッジ』の効果継続のまま、その軌道は襤襤衣のような黒いロープに覆われた骸骨の体を縦に一閃。

振り下ろした黒剣が床にぶち当たり火花が散るエフェクトが出る。そして、真っ二つに割れた髑髏が上下に僅かばかりずれたかと思うと、肋骨の中心にある紫炎がふつと消えたり、その体を崩落させた。

「…………ふう」

少年は額に滲んできた汗をぬぐい、体に生じた熱を逃そうと黒いロングコートをパタパタと煽ぐ。

数秒後、崩落したダイイングの体が白い光子のポリゴンに変化し、虚空へと消えていく。

そして、全てが消えたころに、虚空に一つのアイテムが浮かぶ。それこそ、少年が求めていたものである。

『死神の鎌』。これを『鍛冶師』に頼み分解してもらい、そこから生まれる金属素材が少年には必要だった。

それにゅつくりと触ると、手にずつしりとした重みが感じられる。触ると即座に『ポーチ』に転送される機能をあえて外しているのだ。

「…………」それで、準備はできたかな?」

そう。少年は一年間かけてじつくりと準備をした。前作経験者であるプレイヤーどころかゲーム自体あまりしなかつた少年にとって、ある意味このVRMMOの世界は都合がよかつた。努力した分だけ、結果が現れる。

現実世界ではありえないような事象だ。

一年。このほぼ現実と大差ない世界 仮想現実の世界において、少年は努力に努力を重ねた。前作経験者であるとあるプレイヤーに追いかけていた。

愚直とも言えるほど、ひたすらに。

そして、今、トッププレイヤーたちとあまり大差ないレベルに達することが出来た。

反撃の狼煙は上がった。次は、行動に移す時である。

「…………今度こそだ。白雪。今度こそ、見つけてやる」

に。少年とはぐれ、今も前線で戦い続ける少女を、見つけ助けるため

第一話・一年後（後書き）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

第一話：《鍛治師》遙日爽夜（前書き）

new character 降臨！

『終闇の街』。周辺のモンスターのレベルが全体的に見て中盤ほどの比較的安全な街。

この街に滞在するプレイヤーは全体の一割ほどと、かなり多い。それはこの地帯が普通の安全を得られ、なおかつ普通の稼ぎが出来ることに由来するのだが。他にもう一つ、この街に滞在する理由がある。

それは、モンスター襲撃率の少なさである。プレイヤーの死因の第一位としてあげられるのが、拠点防衛戦である。その際にはNPCの傭兵などを雇つたりすることもできるのだが、やはりプレイヤーのような実力がある傭兵はほとんどいない。

そこはやはり、プレイヤーは自身が生き残るために命を懸けなければならないのだ。

周りは草原や湖といった穏やかで開けた場所なので、奇襲されることはあり得ない。

またに、危険が潜む『クロード』の中でのオアシスである。

「おーっす。久遠のお兄さんが帰つてまいりましたよー」

その街にある鍛冶屋に私服然の少年、日比谷久遠は氣の抜けた声とともにドアを蹴り破り押しに入る。強盗をしようといつわけではない。建てつけが悪い仕様なのだ。

中に入ると一人の少女が口をぱかーんと開けて絶句していた。

栗色の髪の毛を肩のあたりで斜めに切りそろえるボブカットをしている少女で、年ころは十三歳ぐらい。今が元気な思春期真っ盛りな少女である。煤けた鍛冶服を着ていて色気などどこにもないの

が玉にきずで、それを本人も気にしているのは秘密らしい。

「あ、あんた……あの迷宮から帰つて「これたの？」

「当たり前だろ。じゃなけりや行つてない……とも言い切れないか」

「……ちッ。今度こそ死ぬと思つたのに。クマムシ並の生命力ね」

「流石に切り刻まれたら死ぬ。今日は切り刻まれそうになつたけど」

「『ダイニング』だつたつけ？あの迷宮のボス。中盤の迷宮とは思えないほどの実力を有しているから、こじらへんの人じや太刀打ちできないから放つておいた」

久遠は古ぼけた二人座りのテーブルに深く腰を下ろす。見ればところどころ擦り傷だらけだ。クソ忌々しい『ハーケス』の追加システムの所為だ。しかし、この傷もプログラムによって一日も経てば消えてなくなるだろう。

栗色の少女は呆れたような視線を久遠に向ける。この馬鹿は本当の馬鹿だと、はつきりと認識した。

たしか、久遠が潜つたのはレベル60ほどの迷宮だつたはずだ。ここら辺のプレイヤーでは潜ることさえ難しい。そのボスモンスターを一人で相手にしようなどと考へるバカはいないのだ。

「僕の職業は伊達じゃないってわけだよ。うん」

「…………地味の塊」

「それは禁句！…たしかに職業の熟練度上げは地味な上に苦労したけど、それを本人の前で言つちゃあいけない！」

「前作でもその職業はほとんどないと言われるほど、その熟練度上げが地味すぎる最高位職業。地味地味地味、JEW MI」

「遥日爽夜、恐ろしい子…………つ……十三歳、可能性溢れる…………つ……けど、胸の方は期待できない…………つ……貪乳口つ…………つ……」

「ここまで言つと、爽夜の肩がぶるぶると震えだした。怒つてゐる、そう確信した久遠は言い過ぎたと後悔するが時すでに遅し。後悔先に立たず。後の祭り。そんな言葉が頭の中で連綿と繰り返されていく。

ズズズ、と。身長一四〇センチの少女が持ち上げるにはでか過ぎる金槌がその背後から現れた。この世界で外見に騙されると、死ねる。

経験値稼ぎとは、なにも武器を振るつてモンスターを倒すばかりではない。《鍛治師》であれば、ハンマー片手に武器を打つたりしても経験値が得られる。一年間、この少女が思いハンマーを振り回してきたとしたら、筋力値は馬鹿みたいに高くなつてゐるはずだ。もともとはプレイヤーが爽快にプレイできるのが売りな《HELINE》。能力が極端なのである。おそらく、敏捷値にステータスを極振りすれば音速を超える体験だつて可能なはずだ。デスマゲームになつてからは、そう簡単にレベルが上がらなくなつているのだが。

それは今は置いておくとして、あのハンマーで殴られれば、一撃とはいかずとも軽く死ねる。

「謝るか、死ぬか、選びなさいよ。それに、私の胸は控えめなだけよ。決して貪乳などではない」

「」「」、と背後から怒氣が滾っているのが見えてしまった久遠。顔を引き攣らせながら、「暴力口リ」と呴くと頭を下げ謝った。どうやら彼女には小さな咳きは聞こえなかつたらしい。

爽夜は、「ふん」と鼻から息を吐くと、ハンマーを背後に戻す。どうやって仕舞つているかといつと、背後でメニュー画面を展開し、そこから武器である《重鎌グラヴィティ》を選択しているわけである。

「で? 『死神の鎌』、取つてきたんでしょ? 出しなさいよ。今なら出血大サービスの三〇〇パーセント増でやつてあげないこともないけど」

「僕が出血するよねそれ」

適当に反論しながら、久遠はメニュー画面の《ポーチ》をタッチ。そのアイテムウインドウから《死神の鎌》を選択。瞬間、手の平に白いポリゴンが集まり巨大な鎌の形を成した。

「ん、これ。そうだ、ついでに《フルティング》もお願ひ

『死神の鎌』を受け取つた爽夜の顔が呆ける。音を当てはめるとすれば、きょとん、だらうか。口をぱくぱくと開閉させた後、戦々恐々といった様子でおずおずと言葉を紡ぎ出す。

「い、いいの?」

「ワーカーホリックの爽夜ちゃんに『ご褒美なのだよ。ふつはつは、崇めたまえ。おののきたまえ。僕の心の広さに』

「…………やめても、別にいいんだけど?」

「お願いします」の通りですやつてください」

久遠の背にかけてある黒い刀身の漆黒の剣。レベルが五〇に達する直前に偶然エンカウンとした竜を持ちの回復アイテム全てを使い切つて倒した際に現出したもので、万能で高性能な武器である。それぞの武器には《ウェポンズスキル》というものが設定されている場合があり、《フルティング》の場合は《血瞬》。敵を切り倒すたびに鍛冶師の手を借りなくとも性能をアップさせる優れモノである。

ゆえに、今まで何度もワーカー・ホリックの爽夜に、「強化してあげてもいいわよ」と頼まれても、「強化されなくともいいのだよ」と意味無く避け続けていた。

「ほら、大事に扱えよ？」

背にかけてある《フルティング》を抜き、爽夜に渡す。持つにはそれなりの筋力パラメーターが必要なだけ、爽夜の馬鹿力もとい秘めたるパワーなら大丈夫だろう。

「折つたりしたら抱かせてあげてもいいわよ？」

「一三歳が背伸びをしない。そしてその情報を誰から仕入れた今すぐ潰してきてやる情操教育上よくない」

「風深さんから」

「なん、だと…………？」

座っている古ぼけたテーブルからズザザと仰け反る。なわわわわ、

と口を震わせていると爽夜が腕を組んで、

「っていうか、誰でも知ってるわよ。メニュー画面の装備画面のところで初期装備全部はずしてそのままメニュー画面閉じれば

「言わなくてよろしい。お兄さん怒ってしまいますよ？ つまりそれはこの店の半壊を意味している。僕、恐ろしい子…………っ！」

「テメエのフルティンぶち折るぞ」

「DO GE NA」

ふんふんと鼻を鳴らしながら『フルティング』と『死神の鎌』を肩に担ぎ工房の奥に姿を消していった。久遠は、「最近の若者は怒りやすい」などとぶつぶつと呟きながらメニュー画面を開いた。

そしてステータス画面をのぞく。

レベル六五。それが今のが久遠のレベルだ。トッププレイヤーたちのレベルの平均が七〇なので、よくここまでレベルを上げられたものだと自分で感心する。

そして、最高位の職業。爽夜からは地味だと言われまくったが、使い勝手が物凄くいい。それに付随して手に入れたスキルもどれもこれも使いやすいもので、下手にユニークな職業を選んでいたら今頃死んでいた自信がある。

ステータス画面を閉じると、右上に新しく追加されたカウンターを忌々しく見やる。

3485人。

また、減っている。

今、この仮想現実世界の中で生き残っている人間の人数を示す力

ウンター。最初四千人いたプレイヤーも今では三千五百人ほどになってしまった。まだ多い、と言われればそうかもしれないが、このゲームがまったくの新作で無いことを考えてみるとかなり絶望的だ。前作経験者が多いこの世界で、その経験者ですら死んでしまうのだ。これが『ハーカス』の趣向を凝らしたイベントではないことは最初の一ヶ月で判明している。この世界で死んで、現実世界では本当は生きていたとする。今までのことは悪い冗談で、この世界で死んで行つたプレイヤーたちはあちらの世界で生きている、そう根強く信じていた人もいた。

だが、それなら最初の一人が死んだ時点で、自分たち全員が強制ログアウトされていなければおかしいのだ。それがされていないと、いつことは、つまり、この世界での死は現実での死を意味している。限りなく現実に近い仮想世界。

そこに、『死』という概念さえ持ち出されてしまうと、もう現実とはほとんど変わらない。空腹を満たすために食事をし、身なりを整え、その日の糧を手に入れるために働き、一日の疲れを癒すように眠りが訪れる。

それが『クロード』という世界だった。

「なんていうか、難な世界だよ。ホント」

この死亡者の中に、自らの妹、白雪の名が刻まれていないのを祈るばかりである。もし、もう死んでいたとしたら、自分はきっと壊れてしまうだろう。家族をゲームで失うのは、もうじりじりなのだ。

「…………いや、あれは、僕の所為もある、か

暗い思考に陥りそうになつた自分に気付き、黒い皮の手袋をはめた手で頬をパチンと叩く。この世界に来て自分には根暗な部分があると気づかされた。そういう点では、いい人生経験なのかもしれない

い。

工房の奥から金属を打ち合わせる音が一定のリズムで刻まれていく。

爽夜も、たしかこの街に来て初めて喋った人間である。最初は無機質なやり取りしかできなくなつたのだが、半年も通い続けると自然とそうなつてくる。今では『妹』のような立場だ。口が悪いのがいつも傷なのだが。

「…………別れの時は近い、とかカツコつけて言つてみる」

そう。この街での下準備は全て終わった。

レベル上げとゲーム内の動作に慣れること。スキルと職業の熟練度を上げると情報収集。そこで手に入れた新たなスキルに必要な武器やアイテムの収集。

これらすべてを整えるのに今まで一年かかってしまったが、いくら時間がかかるうと出来たのだからこちらのものだ。あとは、反撃を開始するまでである。

ガインガイン!! と小気味いいリズムで金属が打ち合せられる。

そして、唐突にその音が止んだ。鍛冶屋の中が静寂という音に支配される。

「出来たわよ。銘は『村正』、あんたが指定した通り日本刀タイプの剣よ。『ウェポンズスキル』は『血啜』。『フルティング』と同じね」

どうやら、久遠はいわくつきの刀に愛される星の下にあるらしい。日本刀といつても、その刀身は紫と黒で、いかにもといった風貌を兼ね備えている。握つたら何かを斬りたくなるような衝動に襲われなければよいが、と不安タラタラに『村正』を受け取る。

「軽いな」

「あんたの筋力パラメータがおかしいのよ。それ、見た目に反してかなり重い設定してあるんだから」

久遠は爽夜の前で剣を振るつてみる。

日本刀は武器だ。上手く使えなければ意味がない。たしか、HOのQ&Aでは日本刀タイプの使い方のコツとして、刀身を振る際にブラさないというモノがあつたはずだ。刀身が細く、真つ直ぐに入れないとあまりダメージは与えられないし、ガンガン耐久値が減つて行く。

悪い所ばかりなようだが、それを補つて余りあるほどのクリティカルポイントがある。初期装備ですら既に一五〇パーーセントのクリティカルポイントを持つており、ここ一番というときに役立つてくれる。

「ふつ、ふつ」

『村正』の切つ先が空を切る。紅玉月の二〇日 七月の二〇日の蒸し熱い空気を冷たい刀身が引き裂いてゆく。出来るだけ直角直角と思っていても慣れないもので微妙に刀身がぶれてしまう。ヒュヒュヒュヒュ、と若干額が汗ばむにひる、久遠は試し振りをやめた。

「どうよ?」

胸(無いけど)の前で腕を組んで自分より背の高い久遠を見上げながら聞いてくる爽夜。とてつもなく自信があると見えた。

久遠は『村正』から爽夜に視線を移すと、何の気なしにこう言つ

た。

「うん。爽夜に頼んでよかつたよ。ありがとう」

「へ？ ……あ、あたりまえじゃないのよー。」・の、私がやってあげたんだから…！」

どうやらからかわれると思つていたのだろう。素直なお礼が来ると思つていなかつたのかおかしなところできょびつた。それを久遠は微笑しながら見つめる。

「お会計は…三倍は無理だからな、恐ひへりの刀を手放すことになる」

「普通でいいわよ。それでも十万一ヶせいただくナビ

「ん、ちょっと待つてて」

久遠はメニュー画面を開いて、そこに表示してある所持金をトレード枠に入れる。

同じように爽夜もメニュー画面を開き、そこに表示してある一ヶを受け取つた。

商談成立。

「で？ あんたはこれからどうすんのよ」

「旅に出る、とか格好よく着つてみる」

「……『攻略組』に追いついてみるの…」

爽夜は若干いぶかしむような瞳を久遠に向ける。

『攻略組』は、ここらぐんのプレイヤーとは比べ物にならない。命がかかつてている状況にもかかわらず、平常のゲームと同じような振る舞いでダンジョンを攻略し続いている。それも久遠が目指すところの最前線ともなると怪物だ。

天空から隕石が降り注ぎ、振るつた鎌が大地を割る。およそ、現実とほぼ同じこの世界において、一種異常とも言える成長率だ。他のプレイヤーが命を懸けてすら超えられない『一線』を息をするかのように躊躇なく超えて、戦場に赴く。

「あんた、どっちかっていうと『防衛組』の方が似合ってるわよ？」

「それじゃダメなんだ」

久遠は少しだけ笑みをこぼしながら呟く。そこには自虐的な成分が少なからず含まれているのを、爽夜は見逃さなかった。

「妹さん？」

「ああ、そうだ。もう一年も待たせてるんだ。確かに妹はゲームに階級をつけるとしたら間違いなく『廢』のランクがつくほどのゲームだけど、それでも僕の妹なんだ。いくら足手まといになろうと、僕は妹を　白雪を守りたいんだ」

久遠の瞳に闘志が浮き出る。心臓の脈動は早まり、呼吸が若干荒くなる。おそらく、現実世界のベッドの上で寝ている本物の体も同じようなことが起こっているはずだ。せつかちな看護師ならすぐさまナースコールを押してしまおうかもしれない。

「ふうん。だつたら、せめて風深さんには挨拶して行きなさいよ。

あの人、右も左も分からないあんたに無償で色々教えてくれたんでしょう？」

そこで久遠の顔が若干曇る。あからさまに拒絶している顔だ。額に別種の汗が滲み、片頬を思いつきり引き攣らせる。

「む、無償と言つわけではないんだなこれが」

「じゃあ、なによ。なんかしてあげたとでも？」

「十三歳には早い話なのです。聞かないほうがよろしきでせう」

「だから、なによー？」

「いいだらう！ 言つてやる！ じゃないか！ だがそのまま教えても面白みがないのでヒント形式にしてやる。そして、気付くのが早ければ早いほど、君は変態と言えるだらう」

何故かは分からぬが堂々と胸を張りながら、『今からセクハラ発言しますよ』宣言をする久遠。

それでも爽夜は何が言いたいのか分からぬ。鋭い人ならここへんで気付くものだが。

「いいわよ、来なさいよ」

やはつこでも自信満々の笑みを浮かべて久遠を見上げる爽夜。久遠からしてみればこの前口上で気付かなかつた時点で二下なわけだが。

「へへへ、お子様め。……ヒント。風深さんはとても口こです」

「もう二度と、あいつがどう

「おめでとう。爽夜には《THE HENTAI》の称号を与えよ」

」
「

「は、早まるんじゃない爽夜ア！ 早くその《グラヴィティ》を

「振るうんだ！！」

そのあと、金棒を持つた鬼、もとい『重鎌グラヴィティ』を振り回す爽夜に街中を追いかけ回される久遠の姿があつたという。

第一話・『鍛冶師』 遥日爽夜（後書き）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

第三話・《防衛隊長》風深・ウィブルヘイム

「……結局、そうなるのねー」

「結局、やうになりました」

あれから街中をただただ追いかけ回されていたと思つていた久遠だつたが、どうやら爽夜には狙いがあつたらしく、そのまま風深のところに誘導されていた。気付いたとしても後ろから迫る巨鎧の恐怖はダイイングの《リーバーズ》よりも恐ろしいものがあり、爽夜の成すがままとなつてしまつた。

そして、風深の家の前に来ると、爽夜は忽然とその姿を消していった。《フルティング》をその場に置いて。

そうして、意を決してドアをノックすると「はあーい。お姉さんちょっと激しい運動中だから待つててねー」と何をしているのかものすごく気になる言葉をかけられた。

数秒後、ドアが開けられた。

そこに立つていたのは、金髪の美女。スタイルもよくその肢体であらゆる男性プレイヤーをノックアウトしてきた女性だ。髪の毛は染めているというわけではなく元からで、ハーフらしい。碧眼がそれを立証していた。服装は白を基調としたコートを着ていて、幾筋かの紅い線が奔っている。この街の《防衛組》の証だ。

それから、神妙な面持ちをしている久遠を部屋の奥に招きお茶を入れて、久遠がこの街を離れるとの旨を告げたのが、現状である。

「キハはどつちかつていつと《防衛組》向きだと思つんだけじねー」

「爽夜にも言われましたよ。けど、向き、不向きの際論じて、いる場合ではないんです。やるか、やらないかが問題だと思つんですね。うん」

「システムねー」

「システムですか」

売り言葉に買ひ言葉。あ、といえば、い、といつ。

「はー、お姉さんの部隊から、キミがになくなつかうのかー。苦しくなるわねー」

「はは。風深さんつてば、冗談が好きですね。僕程度、すぐに補充が効きますよ」

「それを本当に言つていいんだとしたら、お姉さんの的には怒つちやうかもしないわねー。久遠くんほどの実力者、この街にいるだけでもみんなの支えになつてるんだから」

「この街の防衛力は圧倒的じゃないですか。大丈夫ですよ。指揮系統だつてちゃんとしているし」

「その内の二割はキミが担つてくれていたんだけどねー。その二割がいきなりお姉さんに落としてくるとなると、重圧に耐えきれなくなっちゃうかもー」

「…………、」

「うやら、簡単には逃がすつもりはないらしい。」

だから、苦手なのだ。」この、防衛隊長風深・ウイブルヘイムという女性は。

飘々とした雰囲気。それは相手を油断させるためのブレフで、油断させた相手の心の隙間に一気に滑り込み、言葉巧みに相手を籠絡する。ときには、その体すら使つて。

しかし、悪女というわけではなく、この街に滞在しているプレイヤーからは圧倒的支持を得ているリーダー的存在だ。そして、この街に存在する《防衛組》の総指揮官をしている。職業はたしか《弓使い》だったはずだ。その射撃精度たるや、一キロ先のモンスターのクリティカルポイントに正確に当てることができる。間違いなく、《弓使い》としては最高レベルのプレイヤーである。

何が言いたいのかと詰つと、つまり、

(やつてく)。非常にやつてく)

まだ口下手で体を使つてたらしこんでくる方がやりやすかつた。口が上手い上に、せらひなは体も駆使してくる。それも嫌々というわけではなく、本人自体がソッチの方をよく使う傾向があつた。

さらには、この女性に手取り足取り腰取り教えてもらった恩があるところのだから、そのやつてくをもひとしおではない。

(苦手だー)

そのとき、トルルとビンからか電子音が聞こえてきた。
久遠のメニュー画面からではない。

だとすると、

「あらーん。ちょっと交渉はお預けねー」

そういうと、おもむろにたわわと実つた二つの果実の間に手を突

つ込むと、携帯のよくな端末を取り出した。半径三キロ圏内であればどこでも通話できるアイテムだ。値段の方は一台十万二千ゼットお高い。この街の『防衛組』は一人ずつこれを持っている。

「はいはい、どーしたのー？」

『モ、モンスターの大軍が、大軍が』

「え？ どの程度の規模なの？」

風深の顔から飄々とした表情が消えて、仕事をする顔に変わる。

『北門側から三千です！ 下位が七割、中位が一割とちょっと、上位個体が一、二体います！』

「わかった、すぐ行くわ」

風深は携帯端末通話をすぐに遮断すると、メニュー画面を開き『凄弓ホープ』を装備する。糸を張った両端には鋭い刃がついており、接近戦もある程度こなせる。右耳には片眼鏡型のスコープが装備されていた。

風深は久遠の方を振り向くと、神妙な面持ちでこいつ言った。

「べつに、手を出さなくてもいいわ。とこより、出さないほうがいいかもしれない。今からキミが居なくなるつて言つて、キミに頼るわけにはいかないもの」

「ツー！」

そう。久遠がこの街を去るといふことは、つまりそこまでの影響

を「この街に与える」ということだった。

この世界はゲームだ。だが、全てが不現実の夢の中ではなく、間違いなく命がかけられた、現実世界でもある。

「行きますよ。それとこれとは、話しが別です」

「あら。帰つてきたり」穂美あげちやつわん

「い、いりませんよ、もひ……」

「ふふ、じゃあ、行きましょうか

言つておくが、男が女性の誘惑に負けるのは、致し方が無いことだと、ここに言つておく。

そんな咳きを部屋を振り返りながら言つた久遠だった。

高度文明と低度文明が混ざり合つたような街並み。西洋風の石造りの家々が居並んでいるかと思うと、時折、機械然とした物が出現する。まるでゲームの世界のようだ、という比喩表現はこの世界には当てはまらない。そつ、ゲームの世界なのだから。

その街並みが無数の線に変わつてくのを横目に視認しながら、二人は北門へと急いでいた。

この街の利便性は奇襲されることのない平原の真つ只中ということが、それは逆に言つと攻められるときは攻められてしまうという短所もあった。

しかし、周囲を囲む壁はかなりの防御力を誇るので下位モンスターがいくら攻め込んできてもほとんど危機的状況にはなりはしないが、上位モンスターが混じるとそれまでではない。

北門につくと守備兵の役割をしているプレイヤーに話を聞く。

「下位モンスターのことは別にいいわ。上位モンスターの情報を」

「はい！ 攻め込んできた上位モンスターは一体。蠍型の《ナイトスコーピオン》と、混成獣の《キマイラ》です！！」

「どちらも、面倒くさい相手ね。久遠くん、協力してくれるというのならナイトスコーピオンの相手をしてくれないかしら。キマイラはこれからでなんとかするから」

「分かりました」

そういうと、久遠は一気に大地を蹴る。もつすでに門の向こうでは《防衛組》の部隊が展開されているだらう。後は風深の指示を待つのみとなつていてはだらう。

防壁の高さは一〇メートル。隣に梯子がついているが、今からアレを悠長に昇つていて暇などない。

地面を爆発させるように加速しながら、高くそびえる防壁の少し手前で一気に体を沈める。ばねのように縮ませた体をそのまま上へと伸ばし、前へと進んだ力のベクトルを力任せに上方方向に変換される。

瞬間。地面が爆ぜた。

そこから射出されたように高く飛んだ久遠。それでもまだ五メー

トルほど足りなかつたようだが、それをとある《スキル》で生み出したアイアンソードを壁に突き刺して足場とし、そこからさらに跳躍する。

「相変わらず、桁違いの敏捷性と筋力値ねー」

そんな言葉が下から聞こえてきた気がするが、気にせず久遠は城壁の上へと降り立つた。この移動にも慣れたものだ。およそこの街に来てから半年。その間にうやつて昇つて来たのだから。

「あれが《ナイトスコーピオン》と《キマイラ》か」

《ナイトスコーピオン》は全長五メートルほどの中銀色の蠍のようなモンスターだ。しかし、後ろの六本の足で体を地面から離し、両手が騎士の槍のようになつている。

《キマイラ》は全長三メートルほどの中子のようなモンスターだ。鷲のような翼と、尻尾が蛇になつていなければの話だが。

その他にも、下位竜種で地を這う《レーサードラゴン》などなど、手を抜けないような奴ばかりである。

もつとも、この世界で手抜き、なんて言葉はどこにもないのだが。

久遠は腰にさした《フルティング》を抜き放つ。

敵は《ナイトスコーピオン》。蠍型のモンスター。弱点部位は反り返つた尻尾の付け根と体の内側。

城壁の下でそれを見つめる女性。風深。

エメラルドグリーンの瞳を真上に上ったデータの塊の太陽に煌めかせながら、呟く。

「《剣聖》、か。……ふふ、負けてられないわ。全員、展開よー！」

『剣聖』擁する『終焉の街』での防衛戦が、今幕を上げた。

「誰も、死なせはしない……ッ！」

第二話・『防衛隊長』 風深・ワイブルヘイム（後書き）

「」感想」「批判」「指摘、お待ちしております。

第四話・《剣聖》（前書き）

今週のH.Oは？

久遠君無双。
チートです。
あの人もチート性能
の三本です。うふふ。

まずはモンスターの分厚い層を打ち破ることから防衛は始まる。最前線に躍り出ている下位モンスターの山は攻撃力も防御力もともに最低クラス。あの山に飲み込まれさえしなければ簡単に無双が出来る。

だが、いくら塵のようなモンスターだとしても、集まれば山となる。

下位モンスターを侮って何人のプレイヤーがこの世界から姿を消したのか。數えたくもない。

そして、中位モンスターもいる。下位モンスターの山にばかり構つていると、その山」とぶち壊す勢いで特攻をかけてくる。

そして、上位モンスター。

「キシャツ！」

「ツ！」

まるでバルカン砲の掃射のように、地面が次々と穿たれていく。

『ナイトスコーピオン』の戦力は絶大なものだった。攻撃速度は『ダイイニング』ほどではないにしろ、その両腕の槍の一撃は下位モンスターの山を一瞬でポリゴンの塊にしてしまうほど。

久遠とて、無傷では済まない。

ナイトスコーピオンの槍の連撃の合間を縫うようにして避け続ける久遠。だが、周囲に飛び散らされる礫だけでも少しづつライフゲージが削られ、その穿たれた地面の所為で移動方法が制限されいく。

あの一撃をクリティカルポイント 頭や心臓などの急所 に
貰えば、一撃とはいからずとも一回で軽く死ねる。

そして、これが『スキル』未使用状態であることが、このモンスターの脅威を知らしめていた。

「《ソウル・エッジ》！」

ソウルゲージをほんの少しだけ消費し、迫りくる槍の一撃を強化した『フルティング』で跳ね返した。

このままでは埒が明かないと感じた久遠の強行策だった。

久遠の思惑通りナイトスコーピオンの右槍が大きく横に弾き飛ばされる。

それを彼のナイトスコーピオンのAIが処理し、左の槍で反撃を開始しようと処理するより早く、久遠は動いた。

バグォンッ！ と踏みしめた地面が陥没する。

地面と自らの耐久値において、自らの耐久値が高く、さらに筋力値敏捷値ともにかなりのレベルでなければ起きない現象だ。

ほとんど撃き消えるような速度でその場から前へ移動した久遠。その後、彼からしてみれば徒步のような緩やかさで槍の一撃が地面を抉つた。

一気に体の内側に潜り込み、攻撃の準備を始める。始めるとしても無動作で始められるのだから、始めた瞬間に終わったようなものだった。

弱点である体の内側は堅い外殻とは打つて変わつて触つてみればぶよぶよとしたような肉質が露出している。ここをありつたけの力で攻撃し続ければ三〇秒ほどでこのモンスターは沈む。

尤も、潜り込むことは簡単には出来ないし、三〇秒も黙つて攻撃されているほどヘリックス社のプログラミングおよび自立型AIは

甘くない!

『ソウル・エッジ』を使用したままの大上段斬りを柔らかい肉質に当てる。黒い液体が噴き出でる。不快な臭いが鼻孔に広がるが我慢したまま次の攻撃につなげようとする。が、甘かつた。

「キッシャアアアアアアアアアアアアアアアツ！！」

先の一撃で三割のゲージを消失させたナイトスコーピオンが突如奇声を上げる。

いわば、六本の足を折り曲げなんとか高く跳躍する。戦いにおいて、相手より高い位置に陣取るのが兵法の基本だと言われる。

どうしてか。

それは、一方的に攻撃が出来るからである。

久遠はほんの少しだけその圧巻の姿を眺めていたが、すぐに我を取り戻し迎撃態勢。主に回避に入る。

瞬間。真上から、槍の雨が降り注ぐ。

ズドドドガガガギギギギッ！！ 地面が穿たれる、というよりも地面が爆発するという表現が正しいほどに、久遠の周囲一〇メートルほどの地形がその姿を変えた。

避けられないのなら、受けきるしかない。
しかし、彼の持つ剣は変わっている。細身の剣から、厚さも長さ
も半端ではない、巨剣へと。

『瞬間換装』という名のスキル。職業『剣聖』に付随する特殊スキルの一つで、態々メニュー画面を開いて装備を再設定する必要が無く、脳波を感知して瞬間に装備を任意のものへと換装する。

彼が手に持つのは『塔剣バビロン』。まるで塔のよろに高く聳え

立つその姿から、爽夜が勝手につけた銘だ。

この《ウェポンズスキル》は《鉄壁》。武器での防御中に受けるダメージ衝撃を十分の一までに減少させることができる。

空からの連撃もいつまでも続くわけではない。だが、確実に久遠のライフゲージを削り取った槍の連撃。

凄絶な連撃をし終え、重厚な音とともに地面へと着地したナイトスコーピオン。

ほんの少しの隙が、着地直後に生み出された。

そんな隙を、見逃すはずがなかつた。

瞬時に装備を換装。手に持つていた巨剣が無数のポリゴンに変わった瞬間には、既に久遠は地面を蹴つていた。

軽い攻撃でもダメージは大きい。

ならば、あえて最軽量の武器で数瞬の内に連撃を叩き込む。

「《瞬剣刹剣モーメンツ》」

黒と白の小ぶりな双剣がその手に握られたと、そうAIが認知した瞬間にはもう、その姿は霞んでいた。

今までの移動が口ケットのような派手なものとするならば、今回のソレは光だ。

音も無く、いつの間にかそこにはいる。

《ウェポンズスキル》は《瞬剣》。敏捷値を100倍までに高めるスキル。

一見、長所ばかりのようだが、そうではない。攻撃力が初期装備のソレと同等で、下位モンスターの掃討には便利程度の代物のはずだったのだが、《剣聖》のあるスキルと併用発動することでその威力は無限へと引き伸ばされる。

《剣技美麗》。その《剣》装備で行ったスキルの硬直時間を全く

のゼロへと変える代物だ。

それが敏捷値二〇倍の剣と併用するどどつなるか。

剣先が、軽く振るうだけで震んで見える。といった、面白い現象が起こる。

ナイトスコープオンの内側に潜り込んだ久遠は両手の剣を逆手に持ち替え、高速回転の四連撃の『ターン』を発動。その直後に勢いを殺さず畳み掛けるように一連撃を浴びせ、その後に爆転をしながら上昇の六連撃の『ボルテックス』。

一気に六割近いライフゲージが削られたナイトスコープオンが、最後の手段に出る。

「キキシャツ！」

「のッ！？」

大きく反り返った硬い尻尾を鞭のように振り回す。久遠はそれを繩跳びを飛ぶ要領でかわし続ける。

だが、それがいけなかつたのだらつ。

少しのダメージは覚悟してその尻尾を重量のある武器で止めていたほうがよかつたのかもしれない。

ナイトスコープオンには性別は無い。ゲームの中だからとかそういう無粋なことは置いておくとして、雌雄同体なのだ。体内で精子も卵子も生成でき、交尾をする必要が無く任意の時に卵を産むことができる。

それはつまり、ナイトスコープオンの子供をいくらでも量産できるということだ。

地面に執拗に突き刺していた尻尾の先端。その内部には産卵管と呼ばれる物が通つており、それを地面に打ち込むことで（本来なら

ば獲物に)一瞬で孵化し、餌を求めて徘徊する五〇センチほどの《ベビースコーピオン》が生まれる。

その数およそ二〇。攻撃力防御力ともにナイトスコーピオンと比べるべくもないが、中位モンスター並にはある。そして、小柄な体を活かしての素早い動きも可能としている。

「ハハモチー!?」

この数のベビースコーピオンがあちらで防衛戦を築いている『防衛組』に突っ込んだりしたら、まさに戦況は混沌の渦へと巻き込まれる。

が、久遠とて一人ぞ。

可能の限り。」

あと一人、こちらに手を回してほしい。だが、あちらの戦況を見るにこちらへの増援は無理そうだ。あつちだつて上位モンスターの相手をしているのだ。

そして、もう一つ問題なのが、

まだナイトスコーピオンは死んでいないということがわかった。

一ピオンに止めを刺す、ところはあまりにも難しいものだ。

そう思い、久遠は手の中の双剣に力を込める。

そのとき、空を切り裂く音とともに、三回のベースボールピオンに矢が突き刺さり、爆ぜた。

「……そうだった。あの人もいるのか

久遠が見つめる先には、人影がある。

人影、といつても、ほとんど豆粒にも見えないような点だ。風深・ウィブルヘイム、その人だと、久遠には確信できた。

その人は、数百メートル離れた外壁の上から、モンスターを狙っていた。

「…………、」

システムによって変わる風向きを経験で予測しながら、風深は矢をつがえていた。

つがえる矢は『爆散の矢』。突き刺さった瞬間に爆発を生じるレアなタイプの装備品だった。

標的は、遙か彼方。全高は既にミリ単位にしか見えない。ギリギリと弦がうねりを上げながら、早く発射しようとせがんでくるようにも聞こえる。

「……恩を売るのも、悪くないわ

そして、矢を、解放した。

当たるのを確認するまでも無く、次の矢をつがえ、次々と射出し

ていぐ。

「ふふ お姉さんの手管は、どうかしり。」テク

ツ
！
！
♪

その爆炎が止むころには、ベースボールの姿は消え、代わりに仄かに白く輝くポリゴンと、アイテムがあった。あとで、お礼をしなくちゃな、と久遠は苦笑いをする。しかし、今は残ったナイトスコーピオンに集中する時だ。

「キ、キシヤ」

まるで恐怖しているかのよつて、悲鳴を上げる。

プログラミングされた最初期には、ここまでリアルな反応は見せなかつたことだろう。だが、導入された自立型AIというシステムによつて、まるで生物のような《本能》を手に入れてしまつたのだ。

強者に平伏す弱者。

せめて、瞬の内に終わらせる。

「《聖劍エクスカリバー》」

手の平の双剣がポリゴンに変化し、まばゆい光を放つた瞬間、両刃剣がその手に握られていた。

『ウェポンズスキル』、『天剣』。装備した瞬間に、そのスキルを発動する。

ソウルゲージを全て消費し、得られるその効果はたったの一つ。剣先を空に掲げた。それは、スキルを発動するのに必要なモーションだ。

ズバン！ と、白く輝く光が一〇メートル空へと伸びた。

「じゃあな」

それを、ゆっくりと前に振り下ろした。

悲鳴は聞こえず、あとくされも無く、ただ、レベルアップを告げる電子音が空しく響くだけだった。

第四話・《剣聖》（後書き）

来週もまた見てね。
じゃんけん、ぽん（チョキ）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

「爽夜、その荷物、なんだ？」

「…………ついてく」

防衛戦を終え、風深からの熱烈なセックストアピールをなんとかしおぎ（色々されたのだが）、ダッシュで爽夜の家に行くと、家の荷物すべて持ち運べるリュックサック型のアイテムを背負った爽夜の姿があつた。

「ついてく、つたつて、お前がここにいたなきゃ誰が『鍛冶』を

「いない。あんた以外、客、いない」

「…………え？」

言つてゐる意味がよく分からない。いない、といつのは何かの言葉遊びなのだろうか？

「だからー。この街には他にも『鍛冶屋』があつて、『JIGAWA DANTO』に客入りが少ないのー。」

「…………、」

てつきり、この街にはここしか《鍛冶屋》が無いのかと思つてい
た久遠。

最初に入店 腕イイ 気に入る 盲田 常連 盲田 常連……

最後の永久ループが痛かつたか。男の思い込みほど不味いものは
無い。

「……だから、責任取りなさいよ」

「え？」

「今まで通り、あなたの武器の調整は私がやつてあげるから、今後
の生活の面倒見ろつて言つてんのよ……」

「……まあ、爽夜がいいなら別にいいんだけど

男つて、ケダモノなんだぜ？」と意地悪そうな笑みを浮かべると、
爽夜は両手で空虚なる胸板を抱きしめた。

「お、襲うかも、つてわけ？」

「ぐつへつへつへ

「うう

「嘘だけどな。僕には心に決めた人がいるんだよ。……僕、この世
界から帰れたらアーヴィングと結婚するんだ」

「ここで、問一。

異世界でも現実世界でもない、仮想現実世界で、死亡フラグとや

「うは建設できるだらうか？」

答えは……、

「棒読みでそんなこと言つても、まったく信じられないわよ」

嘘であると、まったくもつて意味がないことにひじで、この場の答えは不明。

「じゃあ、行くかな」

「ビニティ?」

田嶋すは、ゲームクリア、及び白雪と合流。出来れば殿広たちとも合流できれば万々歳だが、もう死んでいるかもしれない。

それは白雪にもあてはめられることなのだが、久遠は絶対にそのことは認めない。何があつてもだ。たとえ、田の前で消えて行つたとしても、それだけは、認めない。

「どこかにだ。情報は集まつてゐる」

久遠はメニュー「ウインドウ」を広げ、爽夜にも見えるように設定する。幾数回か、透明なウインドウを操作すると、この一年で集めに集めた情報が広がる。

「す」……

その情報量に思わず感嘆の声が漏れた爽夜。いつものボロ机に向かい合いつぶにして座り、久遠は無言で操作していく。

やがて、そこには久遠のプレイヤーの限界とも言える情報量が掲示されていた。

「まず、僕の妹の所在だが、」

「ゲームクリアからはいかないのね」

「優先順位、どっちが上かなんて、言つ必要無いだろ?」

「妹さんね」

「違つね。甘いな、爽夜。回率一位だ」

ふふん、と得意げに鼻を鳴らしながらいらつく視線を爽夜に向ける久遠。爽夜と言えば、今にもメニューを操作して《重鎧グラヴィティ》を取り出しちゃうとしている。久遠は、「「めん」「めん」と言つて爽夜をなだめた。

「白雪を助ける」と、この世界をクリアする」とは同義なんだ。白雪を助けてもこの世界から出れなければ意味がないし、世界から出たとしても、白雪が死んでいるなら意味がない

あちらを立てたらこちらが立たなかつた、なんてこと、絶対に起こしたくないのだろう。

万が一、億が一。そんなことが起こらないよう、原因となる種を徹底的に叩き潰しておく。それがどんなに地道で、どんなに時間がかかるひとつも。

「かつここいじさん

「システムってのはカッコいいんだよ」

「ふつん」

「話が進みそうにないから、話を変えるぞ？ まず、妹の所在地だが、『クアドロ・クリアランス』のメンバーらしい」

「ふばツ！？」

ただ一つのその単語にむせかえった爽夜。誰が、どこに、どんなメンバーだつて？

「そ、それって」

「ああ。最前線でこのゲームを攻略している中でも、筆頭。言い換えれば、もつとも危険なところにいるんだよ、僕の愚妹は……」

久遠は爽夜にも分かるように白嘲氣味に笑った。

そう、久遠には分かっているのだ。白雪が、久遠のことを助けようとしていることを。甘えるだけなら、そそくさと帰つてくれればいいのだ。この世界には、それをする権利がある。

「ただし、この情報は一か月前に手に入れたモンだから、今では大分事情は変わってると思う。ただまあ、白雪がいるクランが中途半端な強さじゃないってだけで、少しは安心できた」

「なんで？ 強いからこそ、最前線で戦つてんの！」

久遠は、一拍だけ間を置いて、

「中途半端に強いから、人間つてのはすぐ死ぬんだよ。極限まで強いなら、そんなに簡単に死なないだろ？ 例えると、そうだなあ……」

…大数表示で、万と、不可説不可説転ぐらいかな？ 片方は数えるには疲れるけど、やろうと思えばできないわけじゃない。だけど、片方は数えようという気さえ起らない。強豪と無敵の違い、って言つた方が分かりやすかったか？」

「全部分かりにくい」

「というわけで、白雪は安全と言つわけだ。分かりやすい人間ほど、死にやすい人間はいない」

意味が分からぬ説明だが、故意的に意味が分からぬとしているようだつた。ようするに、白雪は最前線にいながらも、要塞の中にいるのと同義ということなのだろう。

「次に、ゲームクリアなんだが、まったく不明だ」

「でしょうね。十年間、廃ゲーマーが血眼になつて捜したのに見つかなかつたんだもの、初心者であるあんたが一年ごときで見つけられたら、奇跡よ」

十年間、ラスボスの名前すら判明していなかつたのだ。それも、毎日廃ゲーマーたちが十時間以上もプレイしても。

「だけど、見つけられないわけじゃない。これを見てくれ」

そういうて久遠が拡大したのは、一つの地図。

それは、この仮想空間内における、クロードの全世界地図だ。これ 자체はまったく珍しいものではない。世界地図は誰でも持つているものだし、今更だし、前作の終盤あたりではマップすら広げずにプレイすることがほとんどだつたのだ。

「「」。周りの未知領域^{アンノウンブラック}は解放されているのに、一点だけ解放されていない場所があるだろ？」

「ええ、それがどうしたのよ。そんなの、ただの歩き忘れつていう線もあるじゃない。こんな広い世界なんだから」

それもそうだ。ゲームの攻略として未知領域の解放が第一とされているこのゲームで、マップの未踏地域を探して歩き回るなどと言つた重労働、さらには地味労働、誰がするというのだろうか。それに、そういう付近は強いモンスターが山のように存在しているわけで、暇つぶしで行くというわけにもいかないのだから。

「まあ、話は最後まで聞くものだよ爽夜くん

なんだか自信ありげにマップの機能の一つ、マーカーを操作しだす久遠。この機能、使い道がほとんどなく、まったく使われることの無かつた悲しい過去を持つた機能だ。

「「」の未踏地域を、中心、《始まりの街》からもっとも遠い所から順に繋いでいくと、だな？」

マーク機能を使いながら、ただの未踏地域を辿つていく。マジックペンでなぞつているかのようにキュックキュックと音を立てながら、それはやがて、一つの図形になる。

爽夜は氣だるげにその光景を見ていたが、それが中心に近づくにつれて、どんどん表情を変えて行つた。

その図形が、問題だ。

「螺旋。英語でなんて言つが、知つてゐるか？」

久遠が意味ありげな笑みを浮かべて爽夜に質問する。
爽夜は、 知つていた。

「HELEIX」

答えは最初から、出ていたのだろう。

『HELEIX ONE LINE』

ゲームタイトルに、答えはあった。

「これもまだ仮説にすぎないけど、闇雲に探し回るよりは、確實
だと思わないか？」

久遠はここからもつとも遠い、未踏地域を指す。そこは、前線
からもつとも近い、ある意味もつとも危険な地域。
しかし、少年にはここに行く意味が一重にあった。

「ゲームクリアへの一歩と、妹と再会できる可能性が一番高いから
な」

爽夜が良いなら、とはこのことだったのか。

こちらの私情で動くが、お前はそれでいいのか？ と。そう意味
だつたのだろう。

そんなの、そんなこと、いちいち聞く必要があるといつのだらう
か？

爽夜は、悪戯っぽく、やんちゃな笑みを久遠に向けた。それは年
相応の物で、世界を何も知らない瞳だが、小さな事なら小さいだけ
たくさん知つている、そんな瞳だ。

「ふふ。面白くなつてきたじゃん」

ぼろい部屋の中、爽夜は小さな拳を作り、それを自分の前に突き出した。

久遠はそれを見ると、何か分かつたかのような顔をした後、同じように拳を前に突き出した。

こつゝ、と。一人はそれを軽く小突き合わせるだけだった。

それは、《反撃》の合図だつたのかもしれない。

分かるのはただ一つ、希望も絶望もかない混ぜになつたこの世界で、希望がより一層輝き始めたということだった。

「行くぞ、爽夜」

「おつけ。久遠」

この日、《終闇の街》から二人の男女が姿を消した。

この物語は、たつたそれだけのことから始まる小さな《反撃》の物語だつたのかもしれない。

第五話・反撃（後書き）

「J感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

「『剣聖』の噂、知つてゐるか？」

娯楽施設、といつてもいいだろ？

ゲーム攻略の最前線、『明色の街』には、武器防具屋はもちろんのこと、防衛施設から慰安施設、宿泊施設になにまで、あまつさえゲームセンターのような場所まであるのだ。

ゲームの中でゲームとは、ヘリックス社も、ビニまでゲームをゲームにさせるつもりなのか。

そうは言つても、ここは限りなく現実に世界。仮想現実の中だ。現実で行つようなことをここでしても、同等の感覚を得られるのだ。

その、大衆食堂。今日も前線を解放してきたプレイヤーたちで溢れかえつているそこは、『オケーション・プログラム』によって蒸し熱くなつてゐる。

現実世界の、『このよつな状態にある時は、このよつになる』ということを数億パターンプログラムしている。人が密集していれば気温が上がるし、寝転んでいればライフも回復する。

そこで、数人の男女が集まつて、食事をしながら何かを話しこんでいた。

「うん、知つてゐる知つてゐる。『剣士』系の最上位職で、なるためにはものすごーく地味なプレイ条件を満たさなきやいけないから、コ「じやあほんどうつていうか絶対いないだろ？って言つて言つて言つてた

一対一の男女比の中の、明るそうなオレンジ色の髪を肩口で切り揃えた少女が、オレンジジュースのようなものをストローですすりながら氣だるそうに答えた。

「偏屈な奴もいるモンだよなあ。俺の『神殺槍士』よりも、偏屈極まりないぜ」

そう言つのは、黒い髪をヘアバンドで後ろに上げている少年で、へらへらとしたその雰囲氣は、この世界では珍しい。

「つづーかよオ？ その『剣聖』クンがどうしたんだってエ？ たかだか最上位職が現れたぐらいでいちいち騒いでンじゃねエよ」

そう紅い髪をぼさぼさと搔きむしりながら言つのは、一応この場の四人を纏めているであろう少年。まあ、個人個人が個性的すぎて、統一性というモノが無いのだが。

しかし、見れば分かるのは、その体のどこかしらについている、四角形の紋章。

オレンジ色の少女は大きく露出した右肩。

へらへらとした少年は左眼を囲むような形で。

紅い髪をぼさぼさとしているリーダーの少年は大きく開いた胸元

に。

そして、最後の一人。

「…………『剣士』職。…………まさか。だけど、アーニキは…………」

ぼそぼそと、黒いローブの奥で呴く、色素が微妙に抜け落ちた灰色の髪を持った少女。肌は病的なまでに白く、腕も触れば折れてしまいそうな印象を受けるほどに細い。

その少女は、左の手の甲に。

「なアに咳いてンだ？」

「……気にしない。気にしない」

「ちつ。相変わらず薄氣味悪いオタク女め」

「……オタクを馬鹿にするの、よくない。わたしだって、」

「『わたしだって』、なんだって？ お前がだつてじつはんだよ
？ あア？」

「……だまる」

そう言つと、またロープの奥に顔を伏せてしまった。

必死に、自分の弱さを隠すように。慣れていない口論では、絶対に彼女に勝機は無いから。

「まーまー。彗人^{すいと}、落ち着けって。女の子にそんな風に言つもんじやねえつてば」

そうやってイライラしている紅髪の少年をなだめようとするが、まったくの逆効果で、「知るか『テ』」と、逆切れするのだった。

それでもへらへらしている少年は表情を変えず、まだへらへらしていた。

「どうでもいいけどやー、その『剣聖』がクリア方法をゲットしたとかなんとかつて噂も、最近情報として入ってきてるよねー」

オレンジ色の少女は氣だるげにそう呟いただけだったが、がたりつ、と姿勢を正した。

へらへらしていた少年も、少しだけ真剣な表情をして、ローブを着こんだ少女も俯いていた顔を上げた。

その視線の先には 紅髪の少年の姿があった。

「ソレ、ホントなんだろうオナア？」

「わ、分かんないけど、たぶん」

「ハツ！ おもしれ。なら、そのクリア方法とやらを知つてはいる、『剣聖』 クンを、この街でしばらく待つとしますかね」

頭の裏で手を組み、椅子を片足で立たせながら鼻歌を歌い始めた。ただ、それからは陽気さなど欠片も感じられずに、ただただ恐怖のみを煽るような、そんな鼻歌があつてもいいのだろうか。

『神殺槍士』
『獣々勝血』
『古代魔導』
『絶対支配』

彼ら四人を総称するクラン名として、一つの名が挙げられる。

『クアドロ・クリアランス』

四つの絶対領域。

「…………アーキ、あいたいよ」

一つの、想い。

「オレ、思つんだだけじゃ。秘密はマップにあると細かいだよ、うん」

茶色に染髪した髪に、キリッとした黒い瞳。そんなイケメンが最前線の一歩手前の街、《靈蘭の街》で、桃色の髪をした隈が凄いことになっている少女と話しかけている。

少女はといふと、

「はあ？ そんなわけねえだろ。こんなしおっぺー機能に、なんでそんな重要なヒントが隠れてんだよ。あれですか、あたしを舐めてるんですか？ 死ね」

とにかく理不尽な言葉を投げかけてくれのだった。

言葉のキャッチボール。だけど、時速一百キロ、みたいな。

「だからこいつでも舐めてやると」

「必殺『コハジキ』！」

「ぐはあーー？」

後方に数メートルぶつ飛ばされる少年。

それを見ていたり顔の少女。

なんとも、見ていてほつこつするような風景ではある。だが、当の本人たちは本気でやっているのだから、性質が悪い。

路上に大の字で倒れた少年はぴくりとも動かない。

「おーい、殿広？」

「…………」

「へんじがない、ただのしかばねのようだ。身ぐるみ剥いで、売つてもいいといふことだな」

「駄目に決まつてゐー。」

そう言つと、跳ね起きを実演してみせる少年 古沢殿広。ゲーム廃人一步手前ではあるが、運動神経はそれなりにいいようで……とこうより、ここがゲームの中なので、それをいくら言つてもゲームという称号が消えるといつわけではない。

「つたぐ、本当、乱暴だな。紗雨奈ちゃんは」

「ふん。どなお前にひまつれぐらうがちよひどいんじやねえの？」

「いいか、オレがいつまな素振りを見せたつていうんだ？ いつつも苦悶の表情しか浮かべてねえじやねえか」

「…………え？」

「今気付きましたみたいな顔をするなー。」

「今気付きましたー」

「言葉にしないで、お願ひだからー。」

「じゃあ、今田の」飯は殿広のオーパつなー」

「なん、だと」

まあそんなこんなで、いろいろと時間を潰されていくと、ふと、一年ぐらい前の話に切り替わった。

「なんてこいつか、タイヘンなことになってしまったな」

「そんなの、わかりきつたことだ」

一年前のある日。

フザケタ調子で、このゲームのラスボス、この事件の主犯にして黒幕の、ハーフスと呼ばれる少年型の自律型A-Iの反乱が起つた。それで、ちょうど近くにいた殿広と紗雨奈は、殿広は物凄く嬉しそうに、紗雨奈は物凄くウザそうに、行動を共にするようになった。それから、普通にゲームをプレイして、こうこうやつて、強豪と呼ばれるぐらくなはなつたと思う一人。

「なんてこいつか、ゲームを侮辱してゐよな、こんなのが

こきなりだが、そんなことを言へ出した殿広。

「なにがだし」

「ゲームつてのは、楽しむためのモンだら? 」う、なんてこいつか、

心が躍るつていうか。ホント、樂しいはずのモンなんだけどね」

「オレ、このゲームを楽しんでる奴を、見たことねえんだわ、と苦笑いを混ぜて紗雨奈に語りかけた。

「こ、一年、彼が見て回った範囲では、楽しんでいる奴など、一人もおらず、ただただ機械的にクリアを田指しているだけだった。殿広だつてそうだつた。今だつて、このゲームを楽しいと思えない。

「これで楽しめる奴は、本当のぞうだし」

「ま、そ、うなんだけど。けど、な？　このゲーム自体は面白いはずなんだよ。だけど、これ、クリアされたら、絶対に廃棄だろ？」

「そりゃそうだし」

「オレは、それが結構辛くてさ。オレ的には、クリアした後、またみんなで、このゲームをプレイしたいって、思つてんだ」

「そりゃ　　樂しそうだし」

「だからさ、オレ……そろそろ、頑張つてみよつと思つんだけど」

くらつとした表情はなりを潜め、真剣な表情が姿をのぞかせた。その雰囲気に若干ドキつとする紗雨奈だったが、よくあることなので、彼女も茶化す」とはしないようだ。

「ゲームクリア、本氣で田指すの？」

「ああ、うん。なんだか、久遠もそんなこと始めそうな気がする」

「あ、イケメンー咲の方か。あっちの方が好みだなー」

「久遠ぶつ殺す！！」

そうしてまた、とある男女の『反撃』が始まる。

その陰で、とある少年は、知らぬ恨みを買つているとは露ほども知らず。

闇話・『反撃』を開始する者たち（後編）

「J感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125x/>

HELIX ONLINE

2011年11月23日13時51分発行